薬剤師が征く！

るう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薬剤師が征く！

【Ｎコード】
Ｎ０３９９Ｈ

【作者名】
るう

【あらすじ】
新人薬剤師、タケシを主人公にお送りする、新感覚、本格薬剤師小説です。薬は医師、薬剤師の指示に従って、用法用量を守って正しく服用しましょう

プロローグ

薬剤師という職業をご存じだろうか？

薬剤師とは、医師が処方する処方箋に従って薬を調剤する、いわば薬の専門家（プロフェッショナル）の事であるが、概して、その普及度は高くない。

医師、看護師が小説化（あるいは漫画化）される割合に比べて、薬剤師のそれが限りなくゼロに近い事もそれを証明しているといえるだろう。

これは、そんな孤独な職業であるところの薬剤師に焦点を当てて描いた、薬剤師による、薬剤師のための、そして薬剤師を広めるための薬剤師賛歌とも言える愛とロマンスの物語である。

薬剤師ってすばらしい！

注：この物語はフィクションであり、実際の人物・薬局・事件とは一切関係ありません。

第一話目　タケシ、投薬す

「今日からここでお世話になる、薬剤師のタケシです。よろしくお願いします」
タケシは２５歳。今年薬科大学を卒業したばかり。
『よろしくお願いしま～す』
薬局の職員は事務６人薬剤師６人。朝は９時半から夜は７時半まで。土日祝日も営業。働く市民に優しい薬局だ。
給料は決して高くないが、みんな和気藹々としていてやりやすそうな職場だな、というのがタケシのこの薬局に対する第一印象だった。

けれど人生そんなに甘くはなかった。

「誰か～。これ、監査お願いしまーす」
「はいはい。ちょっと待ってねー。誰か！　この患者さん順番違う！　二人くらい飛ばされちゃってるからここお願い！」
「誰か～！　粉、はかって～！！」
「薬剤師さ～ん。患者さんから電話です～」
「誰か！！　監査！！！」
「あああ！！！！　誰も粉はかってないの！？」

……調剤室は戦場だった…。

常に怒声が飛び交う調剤室。そして待合室では子供が泣き叫び、待ちくたびれた患者さんは調剤室を睨んでいる。
「タケシくん、なんとなく流れ、わかった？　じゃ、これ、お願い」
と、いきなり薬の入ったトレイを渡される。一日目でいきなり実践らしい。

（マジかよ…）
とりあえず、さっき言われた通りに処方箋とトレイの中の薬を見比べて、間違いがないかどうかをチェックする。ミリ数も用心深くチェックする。
次に、処方箋と薬袋（薬を入れる袋）も見比べて、ちゃんと正しく入力されてるかどうかもチェック。
そして、いよいよ投薬（薬を患者さんに渡すこと）だ。生まれて初めての投薬が、「なんとなく流れ、わかった？」で任されていいものだろうか…、と思いつつ、ままよ、とばかりに患者さんの名前を呼ぶ。
「き…木村さ～ん」
「はーい、はいはい、よっこらしょ、と」
７２歳、木村ヨシノさん（骨粗鬆症（こつそしょうしょう））が腰を重たそうに上げる。
ゆっくり、ゆーっくりと足を進めて、たっぷり２分ほどかかって短い距離を歩いてきた。
「あ…っと、こ…こんにちは。えっと、薬は…これ…この薬は…」
（あれ？　これ、なんの薬だろ？）
タケシはいきなりてんぱった。薬科大学では薬の名前は一切習わないのだ。
（マジかよ、全然わからねぇ…）
「あら。ボウヤ。初めて見る顔ね。新人さんかい？」
「は…はい」
返事をしつつも、タケシの頭の中はクエスチョンマークでいっぱいだった。
「この薬はね、ビタミンＤ（でー）の薬よ。しっかり頑張んなさい」
と、木村さんは勝手に薬を薬袋に入れて、持参してきたビニール袋の中に突っ込んで湿布を持って、去っていった。
（……）
とりあえず、輝かしい一人目の投薬は終了した。

「何やってんの！　そんな本なんて見てないでさっさと投薬いきなさい！」
「えっ……でもっ…」
二人目の投薬を控えて5分ほど薬の本と首っ引きになっていたタケシに、怒りの声が響いた。
「でも、…わからないんです。どれがなんの薬だか…」
これが薬剤師の台詞だろうか。自分でも情けなくなる。
「そんなもんはね、薬情（患者さんに渡す、薬の説明が書いてある紙）を見て、てきとーに言ってればいいの！」
（なるほど）
目から鱗だった。４、５枚は落ちた。もうこの際薬剤師のプライドも何もあったもんじゃなかった。さっきのビタミンＤ（でー）の薬のように、患者さんに教えられるくらいなら薬情をカンペ代わりにしたほうが１００万倍もマシだった。
タケシは目を輝かせて二人目の投薬に行った。薬情を大事に右手に持って。
「こんにちは」
（よし、とりあえずこんにちはは慣れてきたぞ）
「この薬は寝付きを良くする薬で、こっちの薬は安定剤です」
今度は、まるでちゃんと薬を知ってる薬剤師かのように説明できた。
（よっし。この調子でやるぞ！）
タケシは単純だった。
めらめらと燃えたタケシは、どんどん患者さんをさばいた。
「これは血圧の薬です。これは胃薬です」
「これはなんの薬でしたっけ？」
「ああ、これはコレステロールの薬ですね」
にっこりと笑顔を見せる余裕もでてきた。
（この人胸でけぇ…）
……患者さんの胸元を見る余裕まででてきた。

なんのかんのしているうちに2時間もたつと、もうまるでタケシはベテラン薬剤師のような気がしてきた。なんといっても、薬の副作用について聞かれても、答えられることができるのだ！（薬情に書いてある）

意気揚々と、もう何十人目かわからなくなった患者さんの投薬に向かった。

「何かご不明な点はありませんか？」

「ああ、薬剤師さん、わからないんですけど」

「はい？　なんでしょう？」

自信満々の笑みで聞き返す。

薬情さえあれば、怖いモノなしだ！

「この薬と一緒に飲んじゃいけない薬ってなんでしょうか？」

「……え」

薬情にはそんなことまでは書いてなかった…。

第一話目　タケシ、投薬す（後書き）

実際の薬剤師さんはもっと真面目に働いてますよw

第二話目　タケシ、監査す

「子供用の粉薬の量は、体重で決まるのよ」
二歳年下のセンパイが言った。背が小さくて胸も小さくて可愛らしい。そして更に可愛らしい声でいろんな事を教えてくれる。本来なら薬局長が教えてくれるべき事までなんでも教えてくれる。
なんで薬局長に教わらないのかというと、
「オレの背中を見て学べ！」
という薬局長だったからだ。
当然、薬局長は背中に口があるような妖怪じゃなければ、背中が投薬するわけでも調剤するわけでもなんでもないから、背中からじゃ何も学べない。教えるのが面倒なだけなのよ、と二歳年下のセンパイは、こんなことまで教えてくれた。
ともかく、子供用の粉薬の量は体重で決まるらしかった。
それはなんとなく納得できる。
「わかりました！」
粉薬の極意を学ぶと、タケシは精力的に粉薬にあたった。ちなみに、それを年齢から割り出した平均体重と見比べてその量が間違いないかをチェックするようだ（平均体重は表にして貼ってある）。こういうのを監査する、というらしい。
「２ｋｇ！」
「１９ｋｇ！」
「１４．６ｋｇ！」
「１３．３ｋｇ！」
粉薬の処方がくると、早く調剤できるように処方箋のコピーがまわってくるのだが、タケシは計算しまくって（薬の本に公式が書いてある）、監査してコピーに書いた。
書いた。
書いた。

「あれ？　これ、変じゃないか？」
処方箋を見ると、どうやら3歳の子供らしいのだが、体重が２０ｋｇの計算になる（通常１５ｋｇ）。
「こっ…これはっ…」
『疑義照会』
という言葉がひらめいた。
薬剤師の大事な仕事の一つだ。
処方箋に疑わしい点があったら、医者に確認しなければいけないという決まりがある。
アコガレの疑義照会である。これをやったら薬剤師として一人前だという台詞をどこかで聞いた事がある。
「すいません、薬局ですけ……」
ぶつっ。電話が切られた。いや、薬局長が切ったのだ。
「タケシくん。何をしようとした？」
「い…いや、疑義照会ですけど…」
「なんの疑義照会？」
「この粉薬なんですけど、量が疑わしいので…」
「タケシくん、よく患者さんを見なさい」
「え？」
待合室を見る。待っている子供は……。
「あっ」
肥満児だった。
「なるほど」
「タケシくん、世の中にはいろんな人がいるものなのだ。処方箋から患者さんを視るのも薬剤師の大切な仕事だよ」
「わかりました！」
薬局に勤めて一週間たつが、初めてタケシは薬局長から教わった。しかも、薬剤師にとってとても大切な事を。
さすが薬局長だった。タケシは薬局長を尊敬した。こういう大切なことを教えてこそ薬局長なのだろうか！

それ以降タケシは、６歳で１３ｋｇ（通常２１ｋｇ）の量を見ては、
「これは…栄養失調児か！？」
と思い、３歳で２７ｇの量を見ては、
「メタボの子供か！？」
と思った。
この調子でいけば、粉も極められる気がした。
「うおおおおおおおおおおおお」
「タケシくん」
「は、はい？」
「これ、量おかしいよね？」
「え？　３歳で２７ｋｇですか？　メタボじゃないですか？」
パコンっ！
ハリセンで叩かれた。
「３歳でメタボなわけないでしょ。ちゃんと監査しなさい。疑義照会よ！　え？　薬局長に聞いた？　処方箋から患者を視る？　何言ってるのよ。処方箋からなんてわかるわけないでしょ。受付から待合室にいる患者さんを見るのよ。まったく。ほんとに薬局長ったらロクなこと教えないんだから。ちょっと薬局長！　変なこと吹き込まないでくださーい！」
（……変なこと吹き込まれた）
粉を極めるにはまだまだ道のりは遠かった。
っていうか薬局長のばかぁ…（タケシ、心の叫び）

第三話目　タケシ、調剤す

「しちいちがしち、しちにじゅうし、しちさんにじゅういち……」
ここは小学校ではない。神聖なる調剤室である。
真剣な面持ちで数字を唱えているのは、タケシだ。タケシはこの春卒業したばかりの新人薬剤師だ。
「しちしにじゅうはち……」
「いんいちがいち……」
「しちごさんじゅうご……」
「ろくろくさんじゅうろく……」
けれど薬剤師という理系まっしぐらの街道を進んだはずの肩書きにしては、ずいぶんと基本的な事をやってるとお思いのそこのアナタ。実はこれ、薬剤師にとってはとても重要な呪文なのである。
たとえば、一日3錠で7日分とかだと、21錠の薬を調剤する。一日2錠で21日分だと42錠、などという風に、日数は7の倍数になる事が結構多いので、自然と7の段のかけ算は重要になってくる。
「しちろく……」
「ししちにじゅうはち……」
もちろん、10日分とか5日分とかもあるので7の段以外もマスターしておきたいところだが、ともあれ、今のタケシにとって重要なのは7の段だ。さっきから、7日分で4回も立て続けに調剤ミスをしているからだ。12×35とかを間違うならまだ可愛いものだが、7×5を間違ったりしているのだから恥ずかしいことこの上ない。でも、一日に何百ものかけ算をやっていると、この手の簡単なかけ算のマジックに陥り結構間違いやすいという事はみなさんもなんとなくおわかりかと思うが、今は朝の11時。タケシはまだ15回しかかけ算をやっていない。それで4回も立て続けに間違ってるんだから、ほんとに恥ずかしい。穴があったら入りたい気分だがコ

ンクリートなので穴は簡単に開けられない上に今は仕事中だから穴に入ってる場合でもなかった。
　なので、仕方ないからタケシはかけ算――薬剤師にとって最も重要な、7の段の復習をしているのである。復讐、と言っても過言ではないほどタケシの目つきは悪いが、かけ算に恨みはない。真剣にやってるだけのことである。
「しちろく……」
「ごごにじゅうご……」
「……ケンカ売ってるんですか…？」
「いやぁ、そういうわけじゃないけど、真剣だったからついw」
　と悪びれずに言ってるのは、二歳年下のセンパイだ。可愛いから許してしまうが、やってる事は結構悪質だという事は、かけ算の暗記をした事のある方ならわかるのではないだろうか。
「やめてください。ほんとに真剣なんです」
「わかってるわよ～。タケシくんはえらいっ」
「……茶化さないでください……。お願いします。邪魔しないでください」
　しくしくと泣き出すタケシくん。でも、ほんとに洒落にならないくらい真剣なのだ。この簡単な計算ミスが調剤過誤（患者さんに薬を間違って渡すこと）を引き起こすからだ。
「あっ。患者さん来た！　タケシくん、今こそその努力が報われる時よ！」
「はいっ！」
　意気揚々と調剤をしに行ったタケシくん。

　１０分後。
「何か申し開きは？」
「７のかけ算にまどわされて、５のかけ算を見失ってしまいました……」
「申し開きにならん！」

パコン、と薬局長にハリセンで叩かれた。この薬局ではハリセンがブームなんだろうか。
「すいません……」
５日分の計算で、タケシは何をトチ狂ったか５×３＝２０としてしまったのだ。
「ここで間違うなんて、結構基本に忠実だね。タケシくんは」
「ギャグの基本なんてどうでもいいです……。素直に責めてください……」
「やーいやーい、ばーかばーか。あったまわるーい」
「……」
傷ついてしまった。ガラスのハートである。
と、なにやら事務さんたちがざわざわと言っている。
ざわめきはピタリと止まり、やがて事務の主任さんがしずしずとタケシに近寄ってきた。
「タケシ先生。これを……」
そっ、と手渡されたのは……電卓だった。
「これを使えば間違えないと思うのっ！　タケシ先生には、これが必要なのっ！！！」
ちょっと大げさな素振りで踊りながら電卓を（可愛いシールまで貼ってあった）手渡してきた主任さんは、実は隠れ女優である。劇団と仕事の二足わらじを履いているのだ。
「……」
タケシは更に傷ついた。

んが。
タケシの心とは裏腹に、このプレゼントが功を奏したのだ。
「がーっはっはっはっは！！！！！！　できる！！　できるぞ！！！！！」
さっきから傷ついてばかりのタケシの台詞とは思えない。というか、人格が変わっている。

電卓を使う事によって、いきなり間違えがゼロになったのだ。ここまでタケシくんを舞い上がらせるとは……かけ算、恐るべし。というか、電卓を使って間違えなくなったのは当たり前なのだ。間違える電卓など、湿ったマッチほども役に立たない。

シール付きの電卓を使いこなし、これで調剤ミスも完全撲滅！！！！

と思いきや……。

「あれ？　タケシくん、これ、間違えてるよ」

二歳年下のセンパイの指摘。

「えっ？　そんな馬鹿な……」

「２×２１だよね？　なんで６３錠もでてるの？」

「え…？　なんでだろ？　おかしいな？」

「タケシくーん、こっちも違うなぁ。５×１５が１２５になってるよ」

「ええっ！？」

早い話が、打ち間違えである。２×２１ではなく、３×２１を。５×１５ではなく５×２５をやってしまったのだ。

万能なはずの電卓も、使い方を誤れば意味がない。

タケシくんはまた傷ついてしまった。

「ごいちがご……。ごにじゅう……」

結局、振り出しに戻ってしまったタケシ。処方箋を入れたら正しい薬が出てくるマシンが欲しい、と痛いほど思った。

第三話目　タケシ、調剤す（後書き）

ギャグの基本を塗り込めてみました。

第四話目　タケシ、勉強す

「ねえお兄ちゃん。これ、なんの薬？」
ここはタケシの家である。妹がなにやら薬箱をいじっている。
「……ちょっと待ってろ。今調べる」
薬剤師にとってバイブルともいえる本、「今日の治療薬」を取り出して妹のために薬を調べようとすると、
「わかんないの？　使えないなぁ」
「うるせ。新人薬剤師なんてこんなもんだ」
「膀胱炎になったかもしれないんだよね。なんの薬飲めばいいの？」
「……ちょっと待ってろ。今調べる」
パソコンの電源を入れた。今はインターネットという便利なものがあるのだ。
「……ほんとに使えないなぁ」
「頭が痛かったら痛み止め飲めよ」
「そんなの小学生でも知ってるわよ」
「ナロンエースには二種類の痛み止めが配合されてるんだぞ」
「そんな知識どうでもいい……」
「メチルケトンは水酸化ナトリウムとヨウ素試液を加えるとヨードホルムとカルボン酸……」
「うるさい！！！　今膀胱炎について調べてるんだから黙ってよ！！」
「ヨードホルム反応をなめんなよ」
妹はインターネットで膀胱炎について調べはじめた。薬について何も知らない薬剤師に何か聞く事を諦めたらしい。
「へぇ。膀胱炎って抗生剤飲めば治るんだぁ」
「ほう。そうなのか」
「ねえ、お兄ちゃん、薬局から抗生剤もらってきてよ」
「もらってこれるか」

「もらってこれないの？　こないだ痛み止めもらってきてたじゃない」
「あれは期限が切れたヤツだ」
「えっ、飲んじゃった……」
「騙されたみたいに言うな。期限が切れても充分大丈夫だ」
「お腹壊したらどうしよう……」
「大丈夫。壊さない。でも壊したら病院行け」
「お医者さんになんて言えばいいのよ！」
「そこの内科は炎症反応しか見ないから大丈夫。きっと、風邪でしょう、って言って薬くれるぞ」
「……なんか私、世の中の薬剤師とお医者さん両方を信じられなくなったかも…」
インターネットをやめて、今度は悩み始めた。
「だいたい、膀胱炎なんて水でも飲んでりゃいいんじゃないのか？　薬なんて飲まなくても大丈夫」
「薬のことも知らない薬剤師さんの言うことなんて信用できないなぁ」
タケシのプライドは傷ついた。
「よぉっし！　調べてやろうじゃないか！　打倒！　膀胱炎！」
タケシは奮起した。
「あ、もう寝ようっと」

その夜、タケシは膀胱炎について調べまくった。インターネット、家庭の医学、病理の教科書、ありとあらゆる使えるものを使って調べた。こんなに勉強したのは国試の時と卒試（卒業試験）の時以来だった。
「ふむふむ。排尿障害の薬も使うんだな。菌を殺すために抗生剤、と」
その他、痛みが強い時には痛み止めが使われる。また抗コリン薬というのが膀胱の収縮を抑える為に使われる事もある。細菌が原因

の膀胱炎とそうでない膀胱炎があり、細菌が原因でないときには抗生剤は効かないので注意が必要である。また抗生剤は下痢になることもあるので、整腸剤が一緒に処方されることが多い。あとは、水分をしっかりとって、休息することも重要である。以上、膀胱炎についてのマメ知識です。何かの役に立ててくださいね♪

「ほう。膀胱炎の薬は市販されてるのもあるのか」

結局、タケシは徹夜をして膀胱炎の作用機序とか膀胱についてなども調べた。作者も知らなかったが、結構凝るタイプだったらしい。

「おお！　もう膀胱炎についてはマスターしたぞ！　神になったぞ！！！　なんでも聞いてくれ！！」

「朝っぱらからうざいなぁ。朝ご飯がまずくなるじゃない」

妹はトーストを囓りながら、言った。

徹夜をしてタケシは気づいたが、妹は夜中に何度もトイレに行った。やはり膀胱炎の疑いがある。

ふむふむ、とタケシは自分の考えに満足し、適切な対処法についてのアドバイスをするべく口を開いた。

「――ぼう」

「そうだ。お兄ちゃん、今日病院いってくるから。夕飯、自分でなんとかしてね」

「……え？」

「やっぱ病気になったら病院よね～」

そしてその夜、何か薬が処方されたらアドバイスをしてあげようとカップラーメンを食べながら昨夜の復習をしていたが、結局妹は膀胱炎ではなかったらしいので何の役にも立たなかった。

第四話目　タケシ、勉強す（後書き）

体調が悪くなったら病院へ行きましょう。

第五話目　タケシ、号泣す

「ＰＰＩはＨ２ブロッカーより酸分泌抑制効果が高く、一日一回投与のため服薬コンプライアンスがよく、第一選択薬となる。しかし保険適用上ＰＰＩは胃潰瘍８週間、十二指腸潰瘍６週間という制限がある。維持療法時ではＨ２ブロッカーに変更する。維持療法では夜間の胃酸分泌抑制を目的にＨ２ブロッカーの半量を一日一回睡眠前に投与する。我が国で頻用されている粘膜防御因子増強薬に対する評価は一定ではない。胃潰瘍診療ガイドラインでも、単剤では第一選択薬として勧められない、とされている」

おおー、パチパチパチ、と一同から拍手があがる。

「まぁこのくらいはね。薬剤師としては常識ですよ。ふっはっは」

鼻高々に言ってるのは、今日からバイトすることになった薬大の大学院の少年である。漫画にでてきそうな瓶底メガネがトレードマークらしい。

「ちょっとは見習いなさいよ～。薬を何も知らないタケシくん」

「……はい…」

調剤室のすみのほうで小さくなってしまったのは、新人薬剤師のタケシである。タケシはいまだに薬情をカンペにしないと投薬できないでいる。この間、機械の調子が悪くて薬情がプリントアウトされないでいたら、一人につき１０分くらいかけて予習しないと投薬できなかったという非常に威張れない過去を持っている。バイト君とは同じ年なだけにこれからさぞかし比べられる事になるだろうと沈鬱な表情で調剤室のすみっこでたそがれているのだ。放っておいたらのの字を書きかねない。

「じゃ、さっそく投薬してもらおうかな」

言って、薬局長はトレイを一つ、バイト君に渡した。バイト君はトレイの中を一瞥すると、

「ああ、これはメチクールですね。メチコバールのジェネリックで

ビタミンＢ１２の薬。末梢神経を修復する作用があり、適応外として特発性精子形成不全症、嗅覚性障害、睡眠相後退症候群などにも使用される薬であって他にメコバラミン、イセコバミン、コメスゲン、チオキネートなどがあります」

言い終わると、バイト君は瓶底メガネの縁をくいっとあげる。タケシを見て、かすかに唇の端を持ち上げた。それを見て、ようやくちょっと復帰しかけたタケシがしくしくと泣き出した。

「あー、また落ち込んじゃった。誰かー、タケシくんを励ましてあげてよー。これじゃ仕事にならない」

と、事務の主任さんが踊りながら調剤室に入ってきた。事務の主任さんは仕事と女優業を両立させているのだ。

「ターケシ先生っ。こんなこともあろうかと、私、プレゼントを用意してきたんですっ！　これっ！　きっとタケシ先生に必要だとお〜も〜う〜のぉぉっ♪　これなら投薬台の下に隠せるから、この間みたいに薬情がでなくなってもおーるおっけい！」

さっ、と手渡したのは、ポケット型の小さな薬の本である。こんなこともあろうかと、ってこんな事態に備えてたとは、一体何を考えて生活しているんだろう、というつっこみはベタであろうか。

そして、さらにタケシは傷ついた。調剤室のはしっこで、今度は泣きながら「くすり」の字を書きはじめた。うざったいことこの上ない。

「なんでもいいけどさぁ。みんな仕事しようよ…」

薬局長のつぶやきが、調剤室の暗い空気の中に響いた。

「プロブコールはＬＤＬ受容体を介さずＬＤＬの異化の亢進、リポ蛋白の合成抑制、Ｃの胆汁への排泄の亢進などの機序を介して、ＬＤＬ－Ｃを低下させる。ＡＢＣＡ１の抑制やＣＥＴＰ活性の亢進によりＨＤＬ－Ｃを低下させるが、この低下はＣ逆転送系の活性化に基づいて生じているので、本剤の欠点とはならないと考えられている。ＬＤＬの抗酸化作用も……」

「薬局長ー。患者さんが困ってます」
主任さんが調剤室に駆け込んできた。
みんながなんとか仕事を始めて1時間くらいたったところであるが、一人、3分ほどで投薬が終わってるのに対して、バイト君はまだ一人目の投薬を終えていない。
さきほどまでは、血圧の薬についてのうんちくを語っていたようだが、今はコレステロールの薬のうんちくになっている。どうやら、メタボの患者さんらしい。そして、患者さんは目を泳がせていた。
「うーん。ぼくも困ったな。どうしよう」
「どうしよう、って私に話をふられても困りますよ。薬局長。なんとかしてください」
ちょっと考えた薬局長が、ぽん、と手を打った。
「そうだ。いいこと考えた」

「みんなー、ちょっと集まって」
その日も終わり、みんなが掃除をしている頃。
タケシは泣きながら辞表を書いていた。バイト君の博識っぷりを一日いっぱい見せつけられ、（もとから無いが）タケシのプライドと自信が虫の息のようだ。
薬局長の号令のもと、一同は調剤室に勢揃いした。
「重大な発表があります。今日から入ってくれた彼なんだけど、とうとううちの薬局を卒業することになりました」
おおー、と声が上がる。
薬局長が、患者さんの問診アンケートの裏に書いてあるらしい文字を読み上げる。
「この度、非常に優秀な成績をもって、我が、病気にばん薬局を卒業したことを認めます。これからも、ますますその知識に磨きをかけて医療に貢献してください」
コピー用紙で作った即席の卒業証書をうやうやしくバイト君に渡した。

「まっ、僕の実力からすれば、軽いもんですよ。ふっはっは」
「うんうん。たいしたもんだ」
みんなの拍手に見送られ、バイト君は去っていった。
タケシが呆然となっている。
二歳年下のセンパイが、ぽん、とタケシの肩を叩いて、
「タケシくん。タケシくんはずっとうちの薬局にいてね♪」
呆然となっていたタケシの頬が……ぽっと赤らんだ。赤…。ええっ??

第五話目　タケシ、号泣す（後書き）

今回みょーに影が薄かったタケシくんが、まさかこういう展開になるとは私も思いませんでした…。
次回へ続くか続かないかは謎に包まれています。

第六話目　タケシ、配達す～シナリオ編～

「そこを曲がって、ここを右に行って…。んで、公園を左に…。公園…。公園…？　公園ってどこだ？　っていうか、ここ…どこだ…？」

ケータイを右手に、左手には薬を持って。道に迷ったタケシは途方にくれてしまった。

はじめから説明しよう。

事の発端は、一人の患者さんが在庫してない薬の処方箋を持ってきたことだった。

「薬剤師さーん。この薬、ありますかー？」

事務さんが処方箋を持って、調剤室に入ってきた。

普通なら、処方箋を患者さんから受け取って、すぐに事務さんが入力。そしてその間に調剤して、入力が終わった頃に調剤もちょうど終わり、監査して投薬、という流れになる。

しかし、薬局に在庫してない薬が処方された場合は（事務さんは在庫してある薬をほぼ把握してなくてはならないという条件付きだが）、入力する前に調剤室に処方箋が持ち込まれるのだ。

「ないですね」

「ないね。この薬」

処方箋を持って、二歳年下のセンパイと薬局長が顔を見合わせる。

ちょうど粉の調剤が終わったタケシが、次の処方箋の調剤をやろうと思ったところで、呼び止められる。

「タケシくん。タケシくんもここに入って約一週間たつから、そろそろ在庫してない薬が来た時の対処法を覚えたほうがいいと思うの」

きりっと二歳年下のセンパイが言ってきた。薬局長は例によって何も教える気はないらしく、再びパソコンに向かってしまった。

「えっ。在庫してない薬なんてあるんですか？」
タケシは驚いた。何を隠そう、この「調剤薬局病気にばん」は、薬の在庫数にかけては市内でも有数の薬局なのだ。タケシが入社してきてから、どこの病院の処方箋がきても「薬がない」という事態にはなったことがない。
「そうよ。薬なんてね、星の数ほどあるんだから」
「はぁ。で、何がないんですか？」
「この、ルーランっていう薬よ」
「ルーランってなんの薬ですか？」
「ばかもの」
ぺし、っとハリセンで叩かれた。
「自分で調べなさい」
説明しよう。ルーランというのは主に精神科で使われる薬で、抗精神病薬だ。
「調べた？　じゃあね、患者さんに言ってくるのよ。この薬はありません、って」
「なかったらどうするんですか？」
「まぁだいたいは小分(こわ)けで対応できるわね」
「小分け…ですか？」
「近くの薬局を何軒かあたってみて、ルーランを置いてある所を探すの。んで、見つかったら、そこまでてくてく歩いて買いに行くのよ」
「はぁ…。めんどくさそうですね…」
そこで二歳年下のセンパイはにやりとする。
「もっとめんどくさいこと教えてあげる。患者さんとの話し合いの結果、後日とりにきてくれるんならいいけど、来ない、って言ったら届けに行くのよ」
「ええっ、届けにって薬をですか？」
「そうよ」
「郵送じゃ駄目なんですか？」

「まぁそれでもいいこともあるけど、郵送だと日にちがかかるでしょ。だから、今日中に薬を飲みたいって場合は、お届けにあがるの。ま、交渉次第ね、がんばって～」
ぽん、と背中を押される。
「ちょちょちょちょっと待ってくださいよ。ちょっと考えてから行かせてくださいよ」
「考えるって何を？」
「せりふです。初めての投薬の時みたいな失態は犯したくないですからね。今度はしっかりと案を練っていきたいんです！」
言うと、タケシは椅子に座ってレポート用紙になにやら書きはじめた。そういえば、タケシは凝るタイプなんでした。
「ええっと、前略、竹林さま。今回は不足のお薬が……」
「こら」
ペシ、っとまたハリセン。
「あ、そうか。拝啓のほうがいいかな」
「そうじゃない。手紙じゃないでしょ。シナリオじゃないの？」
「あ、そうか。シナリオ、シナリオ、と。
オレ：実は薬がないんです。手配しますので、後日、とりにきてくれますか？
竹林：そう？　わかったわ。わざわざ手配してくれるなんて、なんて優しい方なのかしら！
オレ：ふっふっふ。医療従事者として、これくらい当然のことです。
竹林：ああっ。シビレる！　医療従事者としてじゃない、あなたがかっこいいわ！
オレ：オレに惚れちゃ」
「ちょっと待てい」
ペシっ。そろそろ叩かれるのが快感になってくるころかもしれないなぁ、と思いつつ。
「何その三流なシナリオは。バカバカしくてつい見入っちゃったけど、面白くないので却下ね」

「つっこみどころはそこじゃないだろう」
珍しく薬局長が参入してきた。
「そういうシナリオを書けと言ってるわけじゃないのだよ。ぼくが書いてあげよう」
さらさら、っと薬局長が文字を書く。
「薬局長…。薬局長って…。字、可愛いですね」
薬局長はものすっごい乙女ちっくな丸文字だった。

ほどなくしてシナリオは書き上がった。
「…、っと。こんなもんだろう。タケシくん。行きなさい。患者さんが待ってるぞ」
「はいっ！」
完璧なシナリオを手に、タケシは待合室に向かって声をはりあげた。
「竹林さ～ん」
しーん。
誰もいなかった。呼びかけた時に誰もいなかった時ほど虚しく恥ずかしい事はないものだ。これは経験したことのある方ならおわかりだろう。
「あ…あれっ？」
「タケシ先生っ。竹林さんは～っ。トイレに行きました～～よ♪」
くるくると回りながら言ってきたのは、舞台女優も兼ねてる事務主任さんだ。
「あ、……そ…そうですか…」
せっかく書いたシナリオを手に、トボトボと調剤室に戻るタケシでした。
（でていったなら一言言ってください事務さん…）

というわけで、タケシはなんとなくせつない気分になりつつ、次

回へ続きます。

っていうか、一般的にはこんなに患者さんを待たせる事はないです。あくまでこれはフィクションですからね？

というか、まだ冒頭に話が戻るまではかなりかかりそうです！

構成間違えた気もすると思いつつ！

第七話目　タケシ、配達す～小分け電話編～

「タケシ先生～っ。たーけばやしさんが戻ってきーまーしーたーよ～～ぉ♪」

では、前回からの続きです。

初めて、在庫してない薬と遭遇した新人薬剤師のタケシくんです。さて、この難関をくぐり抜けて、薬剤師としてちょっとは成長するか！？

「今いきます！　竹林さ～ん」

呼ばれて立ち上がった患者さんがギロリとタケシを睨んできた。なんだか目が据わってる気がするのは気のせいだろうか…。

（そういや精神病の薬だったもんな）

忘れている方もいるかもしれないが、この竹林さん、抗精神病薬を処方されているのだ。

気をひきしめて、タケシは話しかけた。

「すいません、このルーランっていう薬なんですけど…」

「……何よ。悪い？」

「いえ、全然悪くないですごめんなさい…」

ぎろりと睨まれて、思わず反射的に謝ってしまったタケシだが、ここで負けちゃいけない、とばかりに、

「実はですね、この薬がうちの薬局に置いてなくてですね」

「置いてない！？　どうして！？」

「どどどどどどうしてと言われましても…」

責められるように言われ、いきなり窮地に追い込まれるタケシ。ちょっと初めてにしてはハードルが高すぎた感がある。

「ごめんなさいね。うちの薬局では取り扱ってない薬になるんです」

救いの救世主、二歳年下のセンパイがやってきて、さらりと言葉をすべりこませる。

「そう？　どうすればいいの？」

なんだか腑に落ちないというような顔をしつつも、とりあえずは取り合う気になってきたようだ。場の温度がちょっと上がってきたので、タケシはほっとした。
「お取り寄せという形になってしまうんですけど、よろしいですか？」
「取り寄せ？　どれくらいかかるの？」
「今手配しますので、ちょっと待っていただけますか？」
「早くしてよね。まったく」
はい、と返事をした二歳年下のセンパイ、調剤室に戻っていったのでタケシも慌てて後を追う。なんともスムーズなやりとりに、タケシは見入ってしまっていた。

「いやぁ、さすがですねぇ」
ぺし、っとハリセンが飛んでくる。
「ほめてる場合じゃないの。タケシくんもちゃんとできるようにならないと駄目でしょ」
「いきなりは無理ですよぅ。それに、もちょっとラクそうな相手から始めないと」
「相手がどんな人かなんてわからないんだから、よりごのみしちゃ駄目。いい？　さ、今度は小分けのお願いの電話よ」
「小分けのお願い？」
「そう。近隣の薬局に電話をかけて、ルーランを在庫してたら小分けお願いします、って言うの。じゃ、れっつとらーい！」

一軒目
「すみません、〇区にあります、調剤薬局病気にばんの薬剤師のタケシと申しますが…」
「間に合ってます」
ぷつん、ぷーっぷーっぷーっ。

「駄目でした…」
「番号間違えたんでしょ？　ほんとに基本に忠実ねぇ」

二軒目
「すみません、〇区にあります、調剤薬局病気にばんの薬剤師のタケシと申しますが…」
「お世話になっております」
「お世話になっております。もしお薬在庫あれば小分けお願いしたいんですけどよろしいでしょうか」
「はい。なんでしょう」
「ルーランなんですけど」
「ウーレン？」
「ルーランです」
「ローレン？」
「ルーラン！」
「ローロン？」
「ルーラン！」
「ルーレン？」
「惜しいっ！　ルーラン！」
「オシイロレン？」
「どうしてそうなるんですかっ！　ルーランです！」
「デウシリロソウラウンデスクルーラン？」
「ある意味惜しいけどほんとにそんな名前の薬があると思ってるんですかぁ！？　ルーランですってば！」
「ルーランですね」
「やればできるじゃないですか」
「ありません」
「……」
ガチャ。
「滑舌悪いんじゃないの？」

「相手の耳が悪いんです！」

三軒目

「すみません、〇区にあります、調剤薬局病気にばんの薬剤師のタケシと申しますが…」

「お世話になっております」

「お世話になっております。もしお薬在庫あれば小分けお願いしたいんですけどよろしいでしょうか」

「なんでしょう」

「ルーランなんですけど」

「ルーランですか。どこの処方箋ですか？」

「S医院です」

「患者さんの名前は？」

「…？　竹林フサコさんです」

「年は？」

「…えっと…、３６歳です」

「性別は？」

「女性です…」

「結婚してますか？」

「いや…知らないです」

「知らないんですか？」

「…え？　は…はい」

「チッ」

「チッ、ってなんですかチッて！　それにそんなことはどうでもいいじゃないですか！」

「なんていう薬でしたっけ？」

「ルーランです！！！」

「ないですねぇ」

「はじめから言ってください！」

四軒目
「すみません、〇区にあります、調剤薬局病気にばんの薬剤師のタケシと申しますが…」
「お世話になっております」
「お世話になっております。もしお薬在庫あれば小分けお願いしたいんですけどよろしいでしょうか」
「なんでしょう」
「ルーランなんですけど」
「ルーランといえば、５ＨＴ２／Ｄ２拮抗作用があり、セロトニンＩＡ受容体に働く為、抗不安作用もあり、錐体外路系副作用がいくぶん弱い薬ですね」
「……もしかしてバイト君ですか？」
「バイト？　私は正社員ですが」
女だった。
「い…いえ、デジャブです」
「デジャブを小分けですか？」
「できるんですか！？　ルーランです」
「デジャブならあったのに…。ピチピチのが…」
「デジャブはアダルトビデオですか！！　っていうかあるんですか！？　いらないですよ！　ルーランはないんですか？」
「ルーランなんてないわよ」
ガチャン！

五軒目……。
「っていうかセンパイ、ほんとにまだやるんですか？　他に方法はないんですか？　…ってお菓子食べてないでこっち見ててくださいよ！」
「あら。ごめんごめん。ヒマでお腹すいちゃって。だって、もうお昼の時間だもーん」
「僕だってお腹すいてますよ…。それより、ほんとにいつまでやっ

てればいいんですか？　もうどこの薬局にもない気がしてきました…」
「結構諦め早いわね」
「早いんですかっ！？」
「なんか面白いから、市内の薬局全部にかけてもらおうと思ったのに」
「区内じゃなくて市内なんですか！？　どうやってとりに行けって言うんですか！！」
「うーん？　おろしさんよ」
「…へ？」
「遠かったら、卸さんに頼めば車で持って来てくれるから大丈夫ってことよ」
「ええっ！　初めて聞きましたよ。そしたら、ここの病院の門前薬局（近くにある薬局のこと）にかければいいんじゃないんですか？」
「あら。タケシくん、なかなか鋭いじゃないの。そうね。門前ならきっと置いてるわね」
「早く言ってくださいよぅ…」

というわけで、無事に門前の薬局に連絡がとれて、ルーラン小分けに成功。卸さんにもお願いして薬を持ってきてもらえることになった。よかったね。タケシくん。

「遅くなってすみません。お薬、手配つきました」
「遅いじゃないの！！！」
「……ごもっともです…。いろいろ事情がありまして…。それより、薬、あと一時間ほどで入るんですけど、とりに来て……」
「わざわざとりに来いっていうの？」
「いいいいいいえ。お届けにあがりますね…。ご自宅どこでしょ

うか？」
「T区のS町２－３よ」
「わかりました。今日中にお届けにあがりますので」
「早くしてよね」
と言って竹林さんは去っていった。
「じゃ、タケシくん、あとは薬が来たら、お届けに行くだけね。頑張ってね」
「やっぱり僕が行くんですか～？」
「当たり前でしょ。他に誰が行くの。特別に勤務時間内に行っていいからね♪」
はぁぁ…、と深く息をつくタケシであった。つづく♪

第八話目　タケシ、配達す～スーパーマン編～

そして数時間後、卸の人がルーランを持ってきてくれた。
「なんか、手配するのにあんだけ苦労すると、卸の人がスーパーマンに見えますね」
「スーパーマンって…タケシくん、若いのに発想が古いわね。可愛そうに…」
と、タケシはぽっと頬を赤らめた。
「……いいじゃないですか。好きなんです」
「じゃ、今度はタケシくんがスーパーマンになる番ね。いいわよ？家に帰って赤い服着てきても。惜しかったわねぇ。もう少し時間があれば赤い白衣用意してってもよかったのに」
「赤い白衣ってなんですか」

というわけで、やっとこさ冒頭に戻った。
つまりは…タケシは道に迷ったのだ。

（おかしいなぁ。ここら辺のはずなのに…）
タケシは決して方向感覚は悪いほうではない。
だが、行ったことのないアパート街というのは結構わかりづらいものなのだ。目印というものがまるでない。
ぐるぐると同じ所を歩き、やっと「竹林」という表札を見つけた。
「あったぁぁあああ…」
チャイムを鳴らすと、「はい」という声とミシミシという足音。
（怒ってるかなぁ。もう日が暮れちゃったし）
「だれ？」
「調剤薬局病気にばんの薬剤師、タケシです」
「遅い！」
「ごめんなさい！！！」

寝ちゃったじゃない、という声と共にドアが開く。
――と、でてきたのは…、

首が、

変な方向にねじれて…、

目が、

見開かれた、

「ぎゃあああああ！！！！！！！　バケモノ！！！！！」
「なによバケモノとは失礼なボウヤね！　ちょっと首が痛いだけよ！」
目が慣れるのにタイムラグはあったが、慣れてみればなるほど竹林さんだ。
「首が痛いって、大丈夫ですか？」
「もううるさいわね！　薬置いてさっさと出て行きなさい！」
怒られた。
薬持ってスーパーマンみたいに来たはずなのに怒られた。
「ほらっ、ほらっ、もう行きなさい！」
どこから持ってきたか、塩まで撒かれた。
（ひどい…）
仕方ないから、タケシは薬を置いてアパートを後にした。

「はぁ…」
（薬剤師ってなんだろう……）
卸さんはあんなにかっこよく見えたのに。
感謝もされなかった。
考えてみれば、当たり前だった。

（結局竹林さんの最初の対応もうまくできないでセンパイに任せちゃったし、小分けの電話もうまくいかなかったし、道にも迷ったし）
特に期待を抱いて薬剤師になったわけではなかったが、それでも塩撒かれたらやっぱりショックだ。
こんな自分が虚しかった。
（薬剤師なんてやめて、うちのレンタル屋、継ごうかな…）
そうして、一日中、好きなスーパーマンでも見ていようか。
けれど、これからまだ二時間ほどは仕事しないといけない。
こんな気持ちで投薬される患者が可愛そうだ、と思うと余計にタケシの心は沈んだ。

「はぁ……」
「何ため息ばっかりついてるの？　タケシくん」
ある程度患者がきれると、二歳年下のセンパイが可愛く言ってきた。
「実は……」
竹林さんを見て悲鳴をあげてしまったこと、塩を撒かれたこと、そして、薬剤師を辞めようかと思ってること、すべてを打ち明けた。
もう、辞めるのでもなんでもいい。とにかく、しゃべってすっきりさせたかった。
「そう……」
センパイの瞳に黒い影が落ちる。辞めようと思ってると聞いて、憂えてるのかもしれなかった。
（寂しいと思ってくれてるのかな……）
きっとそうだ。ハリセンで叩かれてばかりだったけど、それでも自分とセンパイは一週間同じ職場で汗を流してきたのだから。
「センパイ！　僕！！」
「うるさい」
ハリセンで叩かれた。
「え……？」

センパイは「今日(こんにち)の治療薬」を出してパラパラとめくった。
そしてなにやら悩み出す。
「あの…？　センパイ…？」
「うーるーさーい。辞めるなら辞めていいわよ。荷物、整理しなさい」
トドメだった。
竹林さんからは塩撒かれた上に、センパイからは荷物整理しなさいと言われた。それもあっさり。
もう流す涙もなかった。
無情にセンパイはくるくるとボールペンを回していたと思うと、
「でも、最後に一つ、仕事していきなさい」
「え？　投薬ですか？　でも僕もう……」
「投薬はいらない。電話するの。竹林さんに」
「電話？　なんでですか？」
「いい？　最後に教えてあげる。首が変な方向にねじれる、首が痛い、目が見開かれてる。これは、『急性ジストニア』の症状よ」
「きゅうせいじ……」
「ルーランみたいな、抗精神病薬を飲んでいるときに起きる副作用の一つよ。ルーランで起こる事はあんまりないけど、でも絶対にないとは言い切れないわ。大丈夫。命に別状はないから。アキネトン飲めば治るわ」
「センパ……」
凛とした表情で言い切るセンパイは、まさしくはスーパーマンみたいだった。
「もう一つ教えてあげる。タケシくんは、薬剤師をなんだと思ってるの？　人から尊敬される職業だとでも思ってたの？　そんなことだから大事な事を見落とすの。私たちは、そんな仕事だけはしちゃいけないのよ。どんな事があっても。それが、命を預かるということなの。それがわからないなら今すぐ辞めなさい。迷惑よ」
命を扱う。

（そうだ――）
僕たちは、人の命を預かってるんだ。
大事な、命を。
「僕、電話します！」

それから、竹林さんが薬局を訪れることはなかった。
（こんなもんなのかな……）
後日談ができるということは、タケシは薬局を辞めてはいなかったということだ。
薬剤師というのがなんなのかはまだわからないけど、それでもあの時のセンパイの姿が、言葉が胸に刺さって。
もう少し、薬剤師を続けてみよう、とタケシは思った。
「ターケーシーくん！！」
「なんですか？　センパイ」
「これっ！　あげるっ！」
「こっ…これはっ…」
赤い白衣だった。
「ほら、スーパーマンが好きなんでしょ？　いいわよ～。トレードマークになるわねっ。特注したのよ」
なんとなく、押され弱いタケシくんは赤い白衣を受け取ってしまった。
（もう少し……ほんとに薬剤師、続けるのかな…。僕……）

第八話目　タケシ、配達す～スーパーマン編～（後書き）

今回のお話で、タケシくんは薬剤師として一歩成長しました。
みなさん、これはあくまで一歩です。
このお話を通して、薬剤師の仕事というものが少しでもみなさんに伝わることを祈ってます。

注：竹林さん、変な人と描写されていますが、これは話の都合上そうしただけです。別に、ルーラン飲んでる人はみんなこうだとか、精神病を患ってる方はみんなこうだというわけではありません。

裏話というか蛇足みたいな話もどんどん征く！かもしれない！

いつも薬剤師が征く！を読んでくださって、ありがとうございますw

裏話みたいな話です。というか言い訳入ってますがw

一応第一部完結ということにしちゃいました。でもまだまだ続きます。

薬剤師が征く！について。

ずーーっと昔から私は医療系の話が好きだったのですが、プロローグにもあるように、医者もの、看護師ものがたくさんあるのに比べて薬剤師ものがまったくといっていいほど（というか私は見たことありません）ないのがとても不満でした。なので、私が書いちゃえ、というのがこの話を書くことになったきっかけです。

んでもって、プロローグだけ書いたら満足しちゃって、本筋も思い浮かばなくって、「どうしよう、このプロローグ、見てる人いなかったら消してしまって、無かったことにしちゃおうかなぁ…」と思いながらアクセス解析を見たら、アクセスしてる人がいたので、「うわぁやべぇ。消せない…」ということで無理矢理第一話目を考えましたw

でもそしたら結構気に入ってしまって、今に至るのです。なんとなく運命を感じるお話ですw

コメディについて。

ええっと、ここまでお話を書いておいて言うのもナンですが、ほんとは私、コメディ体質ではないのです…。「君」とかが本性なのですが、でも書いたら楽しかった、っていう感じです。

なんでコメディにしたのかというと、プロローグがコメディっぽかったからコメディ登録をしただけって記憶がありますw

でも「君」とギャップがあるので、このお話と「君」との両立は結構しんどいものがあります…。頑張りますが。
「君」（君が歩くから）を読んだ事のない方は、この機会に合わせてどうぞw

バイト君について。
ほんとは、レギュラーにするつもりだったんです。タケシくんのライバルキャラにしようかと思っていたのですが、タケシくんがあんまり張り合ってくれなかったし、泣いてしまったので、仕方ないから降板です。つまんねぇの、ってのが私の感想です。

名前について。
タケシくんしか名前がついてません。めんどくさいから、って話もあるのですが、まぁついてないほうがわかりやすいでしょう、この話に限っては。ということで、つけてません。そのうち感想もらえるようになったら（そんな日がくるのか！？）募集するかもしれないですw
でもなぜだろう、ほんとにこの話に限っては、名前をつけてしまったら没個性になってしまう気がするのは気のせいでしょうか…。

これからについて。
これからタケシくんはまだまだ成長します。というか実は、これからの話はまったく考えてないのですが。。。行き当たりばったりで申し訳ないのですが、でも楽しくやらせてもらおうと思っています。
何かをやってる限り、言ってしまえば、生きてる限り、成長しないということはあり得ない、というのが私の持論なので（成長してない時期もあることはあるけど、それもそれで成長するために大事な時期だと思います）、そういうことをお話に盛り込めたらいいと思っています。

ではこれからも「薬剤師が征く！」をよろしくお願いいたします。

第九話目　タケシ、病に伏す

「はい…。すいません。はい。お願いします」
がちゃ。
タケシは神妙な顔をして受話器を置いた。
調剤薬局に勤務してはや一ヶ月になろうとしているが、あり得ない事態に落胆の色を隠せない。
落胆。
あってはならないことだ。
なぜこんなことになったのかを思い出すたびに、重たいため息がこぼれる。
どうしてこんなことになったのだろう。
この思考の永遠のループ。

なぜこんなに落ち込んでいるのかというと、タケシは風邪を引いたらしいのだ。
頭が痛い。吐き気がする。熱はない。特に咳がでるわけでもないが、とにかく頭が割れるように痛いのだ。これではとても仕事はできない。ミスをしたら大変だ、とばかりに欠勤の電話を入れたのだ。
風邪くらいひくだろう、と思っているそこのアナタ。
タケシは学生時代は無遅刻無欠席の皆勤賞を誇っていたのだ。
履歴書に書く「頑健」の文字は自らを象徴するにふさわしいものだと思っており、日頃からそれを維持するためにいろいろな努力を怠っていなかった。
乾布摩擦は毎朝の日課であり、ダイエットは潤滑に日常を送る為のスパイスであり、ウォーキングは友であった。
そんなタケシが、体調を崩したのだ。
原因はなんとなくわかっていた。

昨日、歓迎会があったのだ。タケシの歓迎会である。
その時に軽くお酒を飲み、ほろ酔いで外を歩いたのだが、北海道の夜は薄着で歩くにはまだ寒すぎたのだろう。くしゃみを何度かしたのを覚えている。
そして朝起きてからはこのひどい頭痛と吐き気だ。
何か悪い病気にでもなったのかもしれないと思ったくらいだ。
（とにかく眠ろう）
眠りが何よりの薬であることを、タケシはまだ少ない薬剤師経験から学んでいたから。
病院に行くのは熱が上がってからでもいいだろう。風邪は引き始めが肝心だというではないか。とにかく今は、眠ろう。
体が鉛のように重く、タケシはほどなくして微睡（まどろ）みの中に飲み込まれていった。

次にタケシが目覚めた時、時刻は午前１１時をさしていた。
２時間ほど眠ったかもしれなかった。
夢を、見た気がした。
学生時代、勉強してたときの夢だった。
なぜ今頃こんな夢を見るのかと思ったが、体調が悪い時というのはこういうものなのかもしれない。
昔を懐かしむ、なんて、ちょっと縁起が悪くて笑うに笑えなかった。
まるで――、
（死にいく人みたいじゃないか）
タケシはとことん弱気になっている自分を感じた。
たかが風邪。
されど風邪。
風邪は万病の元。
嫌な想像を振り払うようにしてタケシは立ち上がった。

台所に、妹が作ってくれた朝ご飯があったはずだった。
タケシは妹と姉との三人きょうだいで、この家にも三人で暮らしている。
タケシの親は片親で、物心ついたときから母親がいないのだが、タケシが卒業するのを待って、父親はオーストラリアに渡ったのだ。
そしてそれからは三人で暮らしているのだが、４つ歳の離れた姉は滅多に家にいない。
外で何をやっているのかタケシにはわかりかねたが、しっかりしてる姉のことだからたぶんなんとかうまくやっているだろう。
一つしか歳の離れてない妹は、どちらかというと友達みたいな関係だ。
性別の違いなどもの笑いの種にしかならないような、あったかい関係。
タケシはそんな家庭環境に、不満はなかった。
今日朝ご飯を作ってくれたのだって、好意からの行動だ。
普段はご飯が一緒になることはあまりないから、各自で食事を用意し食べている。
今日は病気の自分を思いやってご飯を作ってくれている、そんな妹がタケシは大好きだった。
重たい布団を押しやって、タケシは階下に降りる。
そこに用意されていた食事は――、
（し……食パン？）
食卓テーブルに置かれていたのは、お皿に乗った食パンだった。
申し訳程度にマーガリンがおかれていたが、よく見たらイイ感じに室温に戻されたマーガリンはちょっと溶け気味だった。
そして走り書きのメモに書かれていた内容は、
『ごめん、今日遅くなる』
病気の、
自分を、
思い……思いやって……

（ねぇな……）
なんだか泣きそうになった。
何よりタケシの涙腺を刺激したのは、自分はマーガリン派ではなくピーナツバター派であることを妹が知らなかっただろうことだ。
タケシはマーガリンを冷蔵庫にしまい、ピーナツバターを台所の隅から持って来てパンを焼いて食べた。
吐き気がして何度も戻しそうになったが、風邪を治すためには食べて体力をつけなければならない。
大量の唾と一緒にパンを飲み込んだ。
なんだか冷たい、スッキリとしたものが飲みたくなって、飲み物を探すべく冷蔵庫を開けた。
と、中にはミネラルウォーターがあった。
妹にミネラルウォーターを飲む趣味はない。飲むのはこの家ではタケシだけであり、そのミネラルウォーターも昨日で切らしていたはずだった。
妹が買ってきてくれたのだろうか？
風邪をひいた自分のために、水分をたくさん摂れるようにとミネラルウォーターを？
マーガリンとピーナツバターだって、もしかしたら急いでいたため間違えたのかもしれない。
考えてみれば、そんなことなど些末時だ。
妹がミネラルウォーターを買ってきてくれた、それだけで真心は充分ではないか。
マーガリンを見た瞬間芽生えた妹への猜疑心が、音を立てて崩れていくのを感じた。
（受け取った……受け取ったぞ妹よ！！！！）
タケシはガブガブとミネラルウォーターを飲んだ。
ラッパ飲みした。
「あー！！！！　お兄ちゃん何飲んでるのよ！！！！」
と、後ろから頓狂な声がした。

妹だ。
「ちょっと、その水、サークルへの差し入れだったのに」
「え？」
「やだ、もう半分しか残ってない……」
ミネラルウォーターを奪い取られた右手をしばらく眺めていたタケシは、喉の奥から声を絞り出した。
「今日、遅くなるって……」
「うん。サークルでね、遅くなるんだけど、水忘れてったからさ、慌てて戻ってきたの。そしたらお兄ちゃんが飲んでるでしょ？　信じられない。今度にするから、絶対に弁償してよね。あ、パン、食べたんだ。もう悪くなってるでしょ？　それね、あたしの職場にあったヤツなんだけど、悪くなりそうだからもらって帰ってきたの。お兄ちゃん好きでしょ？　パン」
「……あぁ……」
「まったく。ほんとに恥ずかしいわねぇ。２５歳にもなって二日酔いで起き上がれなくなるなんて」
「……ふつか…よい？」
「そう。さっきお兄ちゃんの職場に寄ってきたの。ほら、昨日すっごい酔って帰ってきたじゃない？　そのときに、ほら、なんていったっけ、あの優しそうなセンパイさん。女性の。あの人がずっと面倒みててくれたみたいだからさ、一応挨拶しとこうと思って。ほんと恥ずかしかったわぁ。昨日は」
「昨日……？」
「お兄ちゃん、記憶にないんでしょ。なんかケタケタ笑ってたけど、目が焦点合ってなかったもん。あ、そうそう。薬局のセンパイさんからお見舞いもらっておいたわよ。スイカ。初物よねぇ。ほんと、気が利くわね、あのセンパイさん」
妹が持っていたタッパーには、大量のスイカが詰められていた。
そしてメッセージもあった。
『水分たくさん摂って、早く職場復帰してね』

タケシは急いでいろんな情報を整理した。
いろんな情報が一気にやってきた気がする。
自分は、二日酔いで、風邪なんかではなく、パンは、悪くなりかけていて、ミネラルウォーターは、妹ので……。

今度こそ、タケシは熱を出して卒倒しそうになった。
薄れゆく意識の中で、タケシは、頭痛と吐き気が二日酔い特有の症状であることを思い出していた。

第十話目　タケシ、数えまくる（前書き）

お久しぶりの投稿です。
あまりにも久しぶりすぎて、ちょっとノリを忘れてしまいましたが
w

第十話目　タケシ、数えまくる

「いーち、にーい、……んーと、ひゃくいち…、ひゃく…あれ？いくつまで数えたっけ？」

「こっちー、２．５グラムが３０４５包あるから、えっと、総量何グラムだろう…」

今日は棚卸の日。

棚卸というのは、単純に言うとただ薬の数を数えるだけだ。

ここで問題になるのは、薬の数と単位。

薬の数があまりにも多いといくつまで数えたのかわからなくなるのは、数えた経験のある人にしかわからないだろう。

そして、１包２．５グラムの漢方薬などは総グラム数で書かないといけないので、結構煩雑になる。

新人薬剤師のタケシは、ただ数を数えて終わりだと聞いていたので（実際その通りなのだが）、楽勝で仕事を終えたあとに友達みんなで忘年会の予定だったのだが……。

「もう９時になりますねぇ。あとどれくらいで終わりそうですか？」

のんびりと薬局長が聞いてきた。

薬局長はあいかわらずパソコンの前に座って何かをやっている。

数えるの手伝ってくれえ！！！　とはやはり上司なので言えない。それに何か大切なことをやっているのかもしれないし、とタケシは自分に言い聞かせる。さっきちょこっと見た画面に、「忘年会をやるなら○○がおすすめ！」という文字が躍っていたのは何かの勘違いだと思うことにして……。

「タケシ先生っ。こういうときこそ電卓ですっ！」

劇団と薬局の二足わらじをはいてる事務の主任さんが、大げさな素振りで踊りながら可愛らしいシールの貼られた電卓を示した。これは過去に彼女からプレゼントされたもので、主に粉薬を作るのに大活躍している。

「ただ数えるのに電卓を使うんですか？」
「そうですっ！　たとえばっ、端数が１２錠、３錠、２錠、１錠、１錠、１錠、とあった場合っ、それを電卓で足していけば、頭を疲れさせないで数えることがで～き～る～のぉぉですっ！」
　どうしてただ電卓を使うだけなのに踊らないといけないんだろう、というツッコミは彼女には通用しない。彼女にとって、踊ったり大げさな素振りをしたりするのは、呼吸をするも同然。彼女が生きるということは、そういうことなのである。
　言われたとおり、１錠１錠数えていたものを、２＋１＋１＋３＋…、とやっていってみる。
「おおっ！　これは！！！！！」
　さっきまで、誰かがしゃべったり何かをして気をそらされるたびに数を忘れたりして数え直していたものが、自動的に表示されている。しかも誤動作をしない限り、消えることはない。これがどれだけラクか、読者の皆様に想像できるだろうか？
　再度、薬剤師の仕事にとっての電卓の重要性を知ったタケシである。
「これが終わったらお寿司だよ」
　という薬局長の言葉を受け、タケシはひたすら電卓のキーを叩きまくった。８時に約束をしてある友達同士の忘年会の二次会に、もしかしたら間に合うかもしれない！　とばかりの勢いだ。
「よし。外用も数えた。漢方もオッケー。飲み薬も全部数えた。薬局長っ！　これでいいですか！？」
　珍しくなんのオチもないまま、無事に数え終わってウキウキのタケシである。
「うーん。そうだねぇ……。とりあえず、お寿司、食べようか」
　みんな揃って、休憩室に移動。
「これも…、これもあげちゃいますぅ」
　席に着いたら、みんな揃って嫌いなネタの乗ったお寿司をタケシ

の器に乗せ始めた。基本的に嫌いなものはまったくないと公言しているタケシである。気付いたら、器にてんこ盛り状態。だが、若いオトコノコであるところのタケシにとって、この量はおやつも同然である。楽勝。

談笑しながらお寿司を食べ、それじゃあお先に失礼します、と事務さんは帰っていった。

「薬局長っ！　帰れますか??」

さらにテンションのあがったタケシ。この時のタケシには、二次会のテンションの高さにも充分ついていけるという自信があった。数を数える、ただそれだけの行為がタケシのテンションのメーターを振り切って、ナチュラルハイ状態にしてしまった。恐るべし棚卸、である。

「そう……。帰るの……」

お寿司の器をすべて洗い終わった二歳年下のセンパイが、静かに言ってきた。

「薬局長、どう思いますか?」

「うん。帰るなら仕方ないよね」

「……え?」

なんだか変なムードである。

実はね、と二歳年下のセンパイが切り出した。

「薬剤師はこのあと、数のチェックをしなきゃいけないの」

「数のチェック……ですか?」

「そう。さっき数えた数と、理論在庫を照らし合わせる作業。これが結構大変なのよねー」

「え……、だって、数かぞえるだけって……」

そう、とお茶をすすっている薬局長がにこやかに言ってきた。

「基本的に、みんなのすることは数を数えるだけ。だから、帰りたかったら帰ってもいいよ」

「でも私は残ってやるけどね。あーあ、いったい何時になるのかしら」

手を拭いたら、二歳年下のセンパイはまた調剤室に戻っていった。
薬局長もそれに続く。
（どうしよう。帰ってもいいんだよな？　っていうか帰りたい。みんなと合流したいし。これで帰っても許されるんだよな？）
とタケシの頭の中でいろんなことを駆け巡らせている時である。
「あ、そうそう」と薬局長が戻ってきた。
「これ、昇給の査定の対象になるから。別に残らなくてもいいけど……ね」
タケシは石化した。
ただでさえ少ない給料には、少しでもアップしてもらいたいものである。
『ごめん、今日無理』という簡単なメールを送信したあと、タケシも調剤室に戻った……。
タケシが薬局をでることができたのは、次の日の午前1時半である。
「タケシくんがいてくれたから、わりと早く終わったわぁ。この間なんか、二人でやったから4時までかかったもん」
二歳年下のセンパイが、スッキリとした表情で言ってくる。
明日からは……もとい、今日からお正月休みだ。

第十話目　タケシ、数えまくる（後書き）

もうお正月ですが何か？状態ですw

第十一話目　タケシ、披露す　～知識編～

あけましておめでとうございます～、という言葉が行き交っていたのも二日ほどのことだ。
あとは通常業務に戻る。
「あ、今月の曲綺麗～」
二歳年下のセンパイが、薬局の待合室で掃除機の音を消してなにやら聴き入っていた。
この薬局では、耳障りのいいクラッシックを静かに流しているのだ。曲は月ごとに変わる。
今月の曲は……。
「センパイ、発注終わりましたよ」
「ごくろーさま」
朝の発注を終えたタケシが調剤室から出てきた。発注の仕事は薬局の在庫を把握するのに都合がいいので、新人薬剤師のタケシがやることになっているのだ。面倒だから押しつけてるってわけじゃないからね！！　というのがセンパイの談だ。
「ねえねえ、今月の曲綺麗じゃない？」
掃除機の端で曲が流れているテレビを指し示す。と、タケシが軽くそれに耳を傾け、即答した。
「ん？　ああ、これはアヴェマリアですね」
「アヴェマリア？」
「そう。たしかこれは……」
「えー！！！！！！」
そ、そんなまさか！？　と大げさな身振りで言ってきたのは、劇団と薬局の事務の二足わらじを履いている主任さんだ。雑巾を持ったまま、なんだかものすごい勢いで突っ走ってきた。よほど急いでいたのか、ぽたぽたと雫が垂れたままだ。せっかく掃除したのに！
とセンパイが中指を突き上げている。

「これはアヴェマリアじゃないでしょ、タケシ先生！」
「え？」
あまりに堂々と主任さんが断言するものだから、タケシは二の次が告げなくなっていた。
さらに主任さんが続ける。
「アヴェマリアっていったらあの有名なヤツでしょ？　もっとこう……」
「ああ、アヴェマリアっていう曲はいろんな作曲家が作ってるんです。有名どころはシューベルトからグノー。あとはモーツアルトも作ってるし、リストだって作ってる。外人だけじゃなくて、日本の作曲家も何人もアヴェマリアっていう題名の曲を作ってますよ」
ちょっと得意げに語るタケシに、主任さんは「Ｏｈ　Ｍｙ　Ｇｏｔ！」とやはり大げさに頭を抱えて休憩室に入っていった。まだ掃除の続きもあるだろうに、忙しい主任さんだ。
「へ～。タケシくん、意外に博識ね」
「博識っていうのかな。まぁ、僕の場合は趣味が音楽鑑賞ですからね。ちなみに今流れてるのは、カッチーニ作曲ですね。これもわりと有名だと思いますけどね」
「趣味が音楽鑑賞っていうと、なんか暗いイメージね」
センパイのあっさりとした突っ込みに、それは聞き捨てならない、とばかりにタケシは声を張る。
「全国のクラッシックファンに謝ってください！　人間は音楽と共に進化してきたんですよ？　音楽を冒涜するモノは地獄に堕ちます！」
「やー、別に音楽を冒涜したわけじゃないよ？　歌とかは誰だって聴くし。ただ、音楽鑑賞が趣味です、って堂々という人も珍しいなぁ、って思っただけよ。そーこまで興奮しなくても。
でもさー、なんかそんな感じだと、趣味っていうよりむしろ特技の域じゃない？　そんなに詳しいと。薬よりも詳しいんじゃない？」
「うーんと、特技は実はピアノだったりするんですけど」

「え！　タケシくん、ピアノ弾けるの？」
「一応ね。子供の遊びみたいなもんですけど、今こそ弾く時間は少なくなってるけど、学生時代は勉強よりもピアノ弾いてましたよ。それこそ放っておいたら一日中でも。文字を覚えるよりも前に楽譜見れるようになってたくらいですから」
　わきわき、と指を動かしてみせるタケシ。センパイは、さも感心した風な表情で両手をあげる。
「へぇ～。すごいじゃない」
「いやぁ、ピアノがないのが残念ですね。あれば、いくらでも弾いてあげたのに」
「ぜひ聴きたかったわ。っていうか、薬剤師よりむしろ、音楽家にでもなったほうが良かったんじゃないの？」
　いたずらっぽくセンパイが目を細める。
「うーん。僕はね、『先生』って呼ばれる仕事にだけは就きたくなかったんですよ。だからピアノの先生とかもなりたくなかった。……それがなぜかこんな仕事に就いちゃって、タケシ先生とか呼ばれちゃってるんだから人生不思議ですよね……」
　と、なぜかすごく暗くなるタケシ。しゃがんで床に「の」の字を書きはじめた。すっかり黄昏れてしまっている。
「い、いや、でも、今の仕事でいんじゃないかな？　なんだかんだいっても頑張って仕事してるし、そりゃ薬の事は何にも知らなくてむしろ患者さんに教えられてるくらいだし、調剤ミスだってまだ多いし、だけど……あ、そうだ。まだ一度も過誤起こしてないもんね？　えらいと思うなぁ」
　わっはっは、と取り繕ってみせたセンパイだが、タケシはジト目で、
「褒めるかけなすかどっちかにしてください……」
「頑張れタケシくんっ！」
　完全にタケシはいじけた。
「おはよー。なんか今日は騒がしいねぇ」

場の雰囲気をまったく理解してない底抜けに明るい声で、薬局長がやってきた。
「あれ？　どうしたの、タケシくん。なんか目が光ってるよ？」
「人を妖怪みたいに言わないでください！　涙です！　涙！　涙が光ってるんです！」
「いやぁ、それもそれで妖怪じみてるけどねぇ。なに？　なんかあったの？」
センパイが、かくかくしかじか、と手短に説明する。と、薬局長は手を打った。
「そういうことか。何？　タケシくん、ピアノ得意なんだ？　じゃあおあつらえ向きだね。今度のメーカーさんとの新年会、たしか、ピアノが置いてあるバーだよ。あそこは。店長に交渉してみるね」
「え？」
二人の声がハモった。
「薬局長さすがっ。美味しいトコ持ってくねー。ぜひ聴かせてよ～」
「はい！　弾きます！　今だって休みの日は一日四時間くらいは練習してるんですよ。任せてください！」
「んで、何弾くの？」
「猫ふんじゃったです」

「へ？」

数秒間、時間が切り取られたかのような感覚だった。

「猫ふんじゃった？」
「はい！」
「それを一日四時間？」
「そうです。最近のマイブームなんです。猫ふんじゃった。もうこればっかりで」
「却下」

「え？」
センパイは面白くなさそうに掃除機の柄の部分をぶんぶんふりまわしながら、
「却下よ却下！　いまどき幼稚園児だって自慢しないわよ。猫ふんじゃったが弾けるなんて。っていうかそんなことやってるくらいだったら、勉強しなさい。薬の勉強を！」
「いや……趣味は自由じゃないですか」
「えぇえぇ自由よ確かに。でもね、猫ふんじゃったに四時間もかけてるなんて聞いて黙っていられるわけないじゃない！　せめて１５分とかだったらまだ許せるものも……」
だんだん雲行きが怪しくなってきたので、タケシも焦ってきた。
「猫ふんじゃった、いい曲だと思うけどなぁ。弾かせてくださいよ～」
う～ん、と薬局長が腕を組んでうなる。
「悩まなくていいですよ！　却下ったら却下！！」
「お願いしますっ」
ふむ、と薬局長が腕をほどいて口を開いた。
「まぁちょっと猫ふんじゃった弾くくらいならよっぱらった人たちの余興としてもいいかもしれないから、場合によっては弾いてもいいよ」
「薬局長！！」
様々な思いの積み重なった二人の声が再びハモった。
さーて仕事仕事、と薬局長は調剤室に入っていった。
さて新年会、ほんとにタケシは猫ふんじゃったを弾くか！？

第十二話目　タケシ、披露す　～猫踏んじゃった編～

「ええと、本日はお忙しいところお集まりいただき、誠にありがとうございました。では、みなさま揃いました所で、薬局長先生に挨拶をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします」

禿頭のメーカーさんがぺこぺこと何度も頭を下げながら言う。汗でもかいてそうな中年のオヤジだ。

「はい。今年もみなさん頑張りましょう。かんぱーい」

『かんぱーい』

実にあっさりとした薬局長の挨拶が終わると、みんながビールやカクテル、ジュースなどのコップを傾けた。新人薬剤師のタケシも緊張を隠せないままにビールをあおる。

今日は新年会だ。ちなみに、時は二月も末になったあたりだが、どうしてここまで新年会が遅れてしまったのかは誰も知らない。

ここはちょっとしたバーのようになっていて、あたりは雰囲気を出すためなのか照明が薄暗くなっている。どっちかというと二次会に行くような場所のようだ、とタケシは思ったが、何しろ初めての会社の新年会なものだから、こんなものかもしれないのかな、とも思う。隅の方には、薬局長が言った通り、アップライトピアノが置いてあった。グランドピアノじゃないことにちょっとがっかりしたが、これもまぁ、こんなものかもしれないのかな、と思う。

周りをきょろきょろと見渡すと、事務さんは事務さんでだいたいかたまって楽しそうに喋っている。事務さんのほとんどがジュースのようで、女優と二足のわらじを履いている主任さんだけがビールを飲んでいる。

スーツが意外に似合ってる薬局長と談笑しているのは、二歳年下のセンパイと禿頭のメーカーさんだ。二歳年下のセンパイは、ハッキリ言って可愛かった……。長い髪の毛をアップにして、左右の耳のところに一束ずつ横髪を下ろしている。耳にはピアス。仕事の時

はピアスなんてしていないからますます新鮮に感じる。服も、上は真っ白の布地をたっぷりと使っていて、そこに自然に入ったギャザーがいくつか入ってることにより、ふんわりとした柔らかい印象になっている。下は短めのデニムを穿いていて、そこからきゅっと引き締まった足首が見えている。ちなみに上も袖を軽く捲られていて、細い手首が見えている。それによって、白い布地の中はさぞかし細い肢体なのだろうと色々な想像をかき立てられる。

一人だけここまで描写が細かかったらみなさんはおわかりかと思うが（薬局長なんてスーツが似合ってる以外のコメントはナシ）、タケシは、普段は見ることのできない二歳年下のセンパイのお姿に惚れ惚れとしていた。もちろん、そんなにじろじろ見てることが露骨にわかると恥ずかしいので、視界に入れておく程度で済ましておいて、ひたすらビールを堪能してるかのように見せかける。ほんとは、視界に入れておくどころか、ガラスケースにでも入れておきたいくらいだがそんなことを考えてるということも心の内に秘めておく。

「タケシ先生、ビールをお注ぎいたしますね」

すすすっと隣に寄ってきたのは、長い髪の毛をさらっと肩に下ろしてる女性だ。スーツを着てるということは、メーカーの人なんだろう。薬局長以外でスーツといったらメーカーさんと相場が決まってる、ということを二歳年下のセンパイからここに来る前に教わった。

柔らかい笑顔に、タケシの鼻はだらしなく伸びてビールのグラスを差し出した。

「タケシ先生、お酒にお強いのね」

「いやぁ、そういうわけじゃないんですけど……、いや、まぁ、そこそこにです」

「うふふ。謙遜なさっちゃいけないわ。挨拶が終わってからまだ30分しかたってないのに、手酌でビールをすでに四杯もお飲みじゃないですか」

数えられていた。
「なんか変な気分っすね。僕よりも年下みたいに見えるのに、敬語なんて。ため口でいいっすよ」
実は結構酔っていたタケシが軽口を叩いた瞬間に、柔らかい笑顔に亀裂が走った気がした……のはタケシの気のせいだろう。……たぶん。女性に歳の話は禁句である。
それでも彼女はなんとか体勢を立て直して言葉を紡ぐ。
「まあぁ、お上手ね。次期薬局長殿」
「え…っ」
今度はタケシの表情に亀裂が走る番だ。亀裂といっても、悪い意味ではない。
（じきやっきょくちょう？）
亀裂が走ったその中からは、だらしなく伸びた鼻が可愛く思えるほどに、その上をいくほどだらしなく緩んだ表情が現れた。
（も……もしかして、僕は次期薬局長として期待されてるのか！？
そういえば、薬局長がいつもパソコンばかりいじってて全然こちらを見てくれてないというのは、もしかして、薬局長がいないという場面を想定して、その上で僕がちゃんと仕事をできているかということが試されていたのか？　そして、メーカーの人にその話がいってるということは、その試験に僕が無事合格したということなのかっ！？）
ゴゴゴ、とタケシが燃え上がった。
やっぱり男として生まれてきたからには、昇進の二文字に憧れる。自分が指揮し、皆が自分の手足となって動く。これほど萌える……じゃない燃えるシチュエーションはないぞ！
「あの……、タケシ先生？」
そうしたらきっと、二歳年下のセンパイも自分のことを尊敬の眼差しで見てくれることうけあい！
そんでもって、ゆくゆくは上司と部下という役職をを超えた関係に！！！！！

「うーん？　えっと、まぁ、……いいかな、新人みたいだし、このくらいおだててておけば大丈夫かな」
小さく言ったメーカーさんの言葉など、もうタケシの耳には入っていなかった。
タケシの目の前には、自分が日経ＩＤにでかでかと写真が載ってる光景が浮かんでいた。言葉に出してしまったら、ちょっと可愛そうな病気を持ってる人として認定されて昇進など夢に見るくらいが関の山になってしまうだろう。
（そうだ。そのためには、まず、メーカーさんと仲良くならなくちゃ！）
やっとちょっと現実じみた考え方になり、タケシは、さっきビールを注いでくれたメーカーさんがいた場所に目をやった。精一杯、賢そうに見えるように。そして、人の良さそうな笑みをこれまた精一杯浮かべて。
「あれ？」
目の前には誰もいなかった。
きょろきょろとあたりを見たら、美人のメーカーさんは薬局長のところにいて日本酒を注いでいた。そしてしきりに何かを囁いている。
「やっぱり薬局長様がいらっしゃってこその病気にばん薬局ですよね。貴方以外の薬局長なんて考えれませんわ。貴方がいなくなることは、すなわち薬局の衰退。いつまでも元気でいらっしゃってくださいね」
（アハハ、笑顔が……彼女の素敵な笑顔が……涙で滲んで見えないや……）
短い幸せだった。噛み締める余裕もなかった気がするほど短い。
「すいませーん、日本酒、めっちゃ強いのお願いしまーす！」
叫んで、ビール瓶を逆さにする。最後の一滴までも飲みきる体勢だ。
「ちょっと、タケシくん、飲み過ぎじゃないの？」

「うひゃっ」
変な声を出してしまったのは、二歳年下のセンパイがいきなりお絞りを額に当ててきたからだ。
「さっきから見てたら随分飲んでるみたいじゃない。タケシくん、明日って仕事だっけ？」
「仕事っすよぉ。バリバリ働きますよぉ」
「ぐでんぐでんじゃない……」
「だいじょーぶっすよぉ。もうね、ガンガン働きますよ」
「どうしたのよ？　そんなやる気いっぱいのタケシくんなんて気持ち悪い……」
「……」
タケシは深くショックを受けた。やる気いっぱいを、気持ち悪いと言われるなんて…。
メーカーさんによって受けたショックと今のショックが重なって、再起不能な感じ。ほぼ自業自得に近いものがある気がするのは作者だけだろうか……。
「……オンガクカになろうかな…」
「えっ、何を世捨て人風に言ってるの～」
「いいんです……。僕なんて、こういう人間関係の軋轢に弱い僕なんて……。芸術家になるしかないんです……」
芸術家をかなり冒涜した言い方だったが、二歳年下のセンパイはそれでも優しく言ってきた。
「タケシくんに、音楽家は無理じゃないかな」
語尾に、えへっ、という感じを含めつつ、爆弾発言。
「……」
もう何も言えなくなってるタケシに、センパイは更に言ってきた。
「だって、結局は猫踏んじゃったでしょ？　それだったら、今のまま薬剤師続けたほうがいいんじゃないかなぁ。何人か患者さんにい

るよ？　あの若い新しい子、なんか愛嬌があって可愛いね、って」

「ねこふんじゃったをなめるなあああああああ！！！！！」

「え？」

タケシは、ずかずかとアップライトピアノに向かって歩いていった。

「はーいはいはい。ちょっとした余興でーす。ウチの新人が、なんか弾くみたいだよー」

いいタイミングで薬局長がみんなの興味を引いてくれた。

ド・レ・ミ……シド、と一オクターブ分弾いてから、右手でドミソドの和音、左手でドからドの一オクターブをすべてアルペジオで鳴らす。ピアノを弾く人というのは、自分の楽器を持ち歩けるわけではないから、そこそこの場所によって様々なピアノのクセに対応できなくてはいけない。これは、タケシなりのピアノの感触の確かめ方だ。発表会とかならリハーサルで確かめることができるが、こういう場では、いかに早くそこのピアノの特性を掴めるかにすべてがかかっている。

そして、弾いた。

猫踏んじゃった、を。

いわゆる有名な「猫踏んじゃった」という曲は、本来なら猫があっちこっち走り回って逃げているところを捕まえようと頑張る、という構成になっている。猫が逃げているシーンをとてもおどけた感じに弾くのがポイントだ。

だが、今タケシが弾いている「猫踏んじゃった」はちょっと違ったアレンジだ。ピアノの音を上から下までたっぷりと使って演奏する。そうすることで、表現力の幅が段違いに拡がる。更に和音は極力抑えて、アルペジオに変える。単純な和音も、アルペジオにするとガツンと迫力がある中にも、美しさも表現できる。

じゃらん。

最後の一音を弾き終わった後、一拍あけて、後ろから大きな拍手と喝采があがる。
「すごーーい！　タケシくん、すごいすごい！！　こんな素敵な猫踏んじゃったは初めて聴いた！」
「タケシ先生素晴らしいです～！！！」
二歳年下のセンパイの声の後に続いたのは、女優と二足のわらじを履いている事務主任さん。さすが舞台で鍛えてるだけあって、声に張りがある。
弾き終わって、まぁそれなりにきっとすごいとは言われるだろうとは思っていたが、思った以上にみんなが興奮していたのを見て、なんだかタケシは恥ずかしい気分になった。酔いも一気に冷めた気がした。
「やー、……どもっす。最近はいろんなアレンジの猫踏んじゃったを弾いてたんですけど、一応ここはバーなので、それなりに雰囲気がでるものを選んで……」
「いやーもうタケシくん、君、薬剤師辞めなさい」
「え…？」
薬局長のいきなりの一言に、タケシは、顔に冷水を浴びせかけられたという表現の意味を実感した。ついでに背中にも冷たい水が……。
「タケシくんは薬剤師やってるのもったいないよ。なんかこー、もっとそのピアノの腕を活かせるような仕事をしたほうがいいんじゃないかなぁ」
『そうですよねぇ』
そこにいたすべての人間が、深く頷く。
「え……？」
「もうね、退職願とかは僕が書いておいてあげるから。君は、何もやらなくてもいいよ。明日からもう来なくていいから」
「ええ……？？」
タケシの困惑をよそに、場は新年会からタケシの送別会になった。

激しく盛り上がるタケシの送別会に、事務主任さんは、タケシの今までについて振り返っている。初めての投薬、調剤で電卓を使ったこと、初めての小分け、等々。

ちょっと聞いてる分には少し涙がでてしまうかのような語り。現に、薬局長あたりは結構感動してるのか目元に光るものが……。

だが、タケシの内面はそれどころじゃない。

（なんで僕、自然に辞める的な流れになってんの？）

誰か助けて！　と心の内で叫んでいたが、誰にも届かず、会はお開きとなった。

とぼとぼと、呆然となったままタケシは夜を過ごし、次の朝になった。

いつもの仕事の時間に、自然に目が覚めてしまった。

（ああ、でも仕事には行かなくてもいいんだな）

と半ば悟った感じで考えたタケシは、ピアノに向かった。もう猫踏んじゃったは弾くまい、と思い、別の曲を選択する。

と、ケータイが鳴った。

薬局からの着信だ。着メロは、猫踏んじゃった。

（あとで着メロ変えてやる）

と思って電話にでると、二歳年下のセンパイの声が聞こえてきた。

「ちょっとー、タケシくん、起きてるじゃない。仕事よ。どうしたの？　もう遅刻だよ？」

「え？　だって、もう来なくていいからって薬局長に……」

「何言ってんの。あんな酔っ払いの戯言なんて流しなさい！　猫踏んじゃった、を理由に退職なんてされてたまるもんですか。早くきなさーい！！」

「わ……わかりました！」

やはり、自分の居る場所は薬局なのだ。自分は薬剤師なのだ、と再確認した時でもありましたとさ。

第十三話目　タケシ、震災について考察す（前書き）

２０１１年３月１１日に起きた震災についてがテーマです。
途中で読むのをやめてしまった方も、後書きだけはできれば絶対に読んでください。

第十三話目　タケシ、震災について考察す

「は～い、みんな揃ったみたいだから、ミーティングやるよ―。ミーティング」
「薬局長、椅子、一つ足りないっすよ～」
「あー、椅子？　じゃあさぁ、待合室に行こうか。あそこなら椅子がっつしあるでしょ」
　そう言うと、張り切って薬局長は待合室に向かった。椅子を並べていたタケシは慌てて方向転換をする。
「あぁあ！　普段なら今頃はまだ優雅に朝食をいただいてる所だったのにぃ！」
　演技がかった声音で言うのは、女優との二足わらじを履いている事務主任だ。その後にぞろぞろと事務っ子が眠そうな顔で歩き、二歳年下のセンパイはそのさらに後ろから歩いている。彼女のなんだか真剣そうな顔つきに、タケシは今回の事の大きさを知る。
　今回の事
『東日本大震災』または『東北地方太平洋沖地震』
　数日後はにそう呼ばれることになる地震が起きた3月11日その日は、北海道に住むタケシたちはいつも通りに調剤業務をしていた。
　立って歩いたりしてると気づかないもので、その地震に真っ先に気づいた人は、全盲の患者さんだった。さすが感覚で生きてる人は感覚が鋭敏だ、とタケシは感心したものだ。
　待合室で、「地震だよ、地震」とその全盲の患者さんがしきりに言っていて、その後、座っていた事務っ子が「あ！　地震だ！」と言い、そうしてようやく建物が横にガタガタ揺れてる事を全員が知った。
　タケシは元々は地震の多い地域に住んでいたことがあり、「このくらいの大きさだったら震度3くらいかな？」とぼんやり思っていた。

みんながワイワイガヤガヤ言っており、待合室の人たちもきょろきょろとあたりを見回していた。
処方箋の入力業務を行っていた事務さんの手が止まり、調剤、監査を行っていた薬剤師の手も止まり、その薬局の中にいる人すべての頭の中は、地震が起きている、ということに支配されていた。
何分もに渡る時間の間、ずっと誰も投薬どころか入力すら行われていなかったが、患者さんの誰も怒り出すことはなかった。
タケシは本当に地震に慣れていたので、なんだか不思議な気持ちでみんなが動揺しているのを見ていたものだ。
けれど何分か経つうちに、地震に慣れているタケシにも、慣れてないことが起こった。

いつまで経っても横揺れがおさまらないのだ。

当然そのことに気づく人もでてきて、「ちょっと、なんか長くない？」という声も上がっていた。
そして１０分以上たっただろうか？　時間の感覚はまったくなかったからタケシにはわからなかったが、その頃にはガタガタと不吉に揺れる調剤室にも段々落ち着きがみえてきて、事務さんも入力を再び始め、それにならって薬剤師も調剤と監査を行った。そうしてるうちに、揺れはおさまった。
そして次にもう一度、揺れを感じたのはそれから少したった後のことだった。
ちょうどタケシは、粉薬の袋に入れる印字の入力を行っており、その際、その機械に寄りかかっていたので真っ先に揺れに気づいた。
あっ、また揺れた、と思ったが、なぜか印字の入力に何度も失敗していたタケシは地震なぞに構ってるヒマはなかった。いつもはスムーズに入れられる印字が、なぜかこの日この時間はうまくいかない。これも何かの暗示か？とあとで思わなかったでもないが、それは単なる偶然であることは誰の目にも明らかだ。たぶん。

そして、みんながまた動揺してる間もずっとタケシは機械とにらみ合いを続けており、ようやく印字も無事に終わって、それでもまだおさまらない揺れに頭を傾げたものだ。
結局震度はタケシの予想通り3だったが、規模とその大きさはタケシの予想を遙かに上回るものだった。
その後のことは、周知のことであろうと思う。
ちなみに地震に慣れていたはずのタケシ、揺れてる最中に必死に細かい作業をしていたせいもあり、そのあと地震酔いというか、ともかく酔ってしまってひどい吐き気と頭痛に襲われる事になるがこれは地震をモロに受けてしまった地域の人たちの被害の度合いから考えるとほんとに些末時である。

さて、話を戻そう。
ミーティングなんてものは、はっきりいってやったことがない。
初のミーティングである。
議題はずばり、「震災の後、我が薬局にできることを考えよう」である。薬局長は薬局の仕事が終わってから、家に帰るまでずーっとスマートフォンで震災の番組を見ており、家に帰ってからはほとんど夜を徹して震災関係の番組を見続け、妻と涙を流し続けて思いついたテーマだ。……張り切りすぎてる薬局長ちょっと怖い、という意見も多数あったが（普段、ぼけーっとパソコンをいじってるだけなだけにその落差が……）、震災の規模はそれを補ってもまだあまりあるほどのものだったので誰も異を唱えなかった。ちなみに薬局にいる間は、ずーーっとパソコンに向かって、薬剤師会からの告知か何かを見ていた。
「ささっ、みんな待合室の椅子にてきとーに座って―！　ミーティング始めるよー！」
薬局長はさっきから何度も、ミーティングという言葉を連呼する。気に入ったのだろうか…。
「でも薬局長、ここ、北海道で震災の被害もないのに何かできるこ

となんであるんですか～？」
「タケシくん、今、被害がないと言ったね？」
「……は…、はい…」
「震災の被害はあるよ！　東北地方にある卸の支店からは連絡不通みたいだし、薬も、入ってきてないものもあるんだよ」
「そうなんですか？　っていうか、入ってきてない薬なんてあるんですか？」
　タケシが素で驚く。震災の影響で薬がないので、という話を聞いたこともなければ、患者さんにそういう説明をしたこともなかったからだ。
「たとえば、○○っていう薬、いつも５００錠単位で買ってたの覚えてる？」
「あ、そういえばこの間は１００錠のが５つに変わってましたよね」
「そう。あれも、５００錠のものがなくなったから、とりあえず卸の人が１００錠の箱を５つ手配してくれたんだよ」
「ああ、そういうことだったんですか」
　言われてみれば、他にもそういう薬があったことをタケシは思い出す。ただ揺れただけで終わったここですら、そういう小さな変化はあるのだ。やはり今回の震災は大きいものだったのだろう。
「そういえば、１２日に来た患者さん、こんなことを言ってたわ」
　二歳年下のセンパイが、少し笑って話し出す。
「皮膚科に受診した結構高齢の患者さんなんだけど、『ほんとに揺れて怖くてねぇ。なんかあったら大変と思って、指輪とかネックレスをありったけつけてたの。そうすれば、何も現金持たないで逃げてもお金に換えられるでしょ？』って。そのネックレスとか指輪にまけて（かぶれて）皮膚科を受診したんですって」
「いつでも避難できるようにしてたってことですかぁ…。……でもそれもなんかびみょーに震災の被害と言えなくもないですね…」
　角度を変えれば笑い話にでもなりそうな滑稽な話ではあるが、でもこんなに大きな事態になってる今、笑ってはいけない話だ。

その場がなんとなくシーンと静まりかえってしまった。
そもそもこの議題自体が、笑いながらできるものではないような内容である以上、こういう空気になるのが正しい気もするが、……でもだからといって、どういう話をしたら正解なのかもわからず、タケシもただ黙っていた。
そんな中、こんな空気にした張本人（たぶん）の二歳年下のセンパイは、なにやら席を立って休憩室に向かった。
それを尻目に、薬局長が言った。
「ここはね、まだその程度の被害で済んでるからいいんだよね。５００錠の箱がなければ１００錠の箱を買えばいい。マリーアントワネットの言葉に似てるね」
少し笑って言ってたが、……しかし、他は誰も笑わない。アメリカンジョークのように聞こえるのは自分だけだろうか、とタケシはそっと思っていた。
そして薬局長は続ける。
「たとえば、インスリンがないって困ってる人がいるの、知ってるかな？」
「あ、あたしのお母さんがそんな話してた気がする。叔父さんがインスリンなくなっちゃうかもしれないからって。……叔父さんはそんなに被害のひどい所にはいないんだけど、でも輸送の関係からとかって……」
事務っ子その１が発言する。
「インスリン、ないんですか？」
インスリンは糖尿病の治療のための注射薬で、Ｕｌｔｉｍａｔｅ Ｗｅａｐｏｎとも言えるべき存在だ。ちなみに、最終兵器という意味である。わざわざ英訳した上で和訳した意味はさっぱりない。
どんな薬が効かないタイプの糖尿病の人でも、インスリンさえあれば絶対に血糖値は下がるが、逆にいうと、この薬がないと大変なことになってしまう糖尿病の患者さんは多いのでこの事態は非常に深刻である。

「ないというか、すごく不足してる状態だそうだ」
「叔父さん、どうするのかしら……」
事務っ子その1が青ざめた表情をする。
「他にも、慢性疾患を抱える人はとっても困ってる。透析を受けてる患者さんしかり、精神病を患ってる人しかり、だ」
そんなことを言われてしまっては、ただ頷くかうつむくしかなくなってしまう上にタケシたちとしてもどうすることもできない。
薬剤師というのは本当にいざというときにさっぱり頼りにならない存在であることが身にしみてわかるが、たとえ医者だったとしてもこの事態はどうすることもできない。自分がボランティアとして現地に赴くとしても、まさか食料や水がなくて困ってる場所に行って、向こうの食料や水を使うわけにはいかないし、せっかくの渇いた綺麗な土地に陣取って生活をするわけにもいかない。サバイバルな場所でサバイバルにきちんと生きていくしっかりとした意思と技術をもって赴かないと、ただの邪魔になってしまうということだ。
「薬局長、僕たちはどうすればいいんでしょうかね……」
タケシは完璧にブルー入っていた。あたりを見れば、かすかに涙を流してる事務っ子もいた。
「インスリンの不足について、相談できる窓口があるの」
紙パックのコーヒー牛乳を持って休憩室から戻ってきた二歳年下のセンパイが、事務っ子その1に向かって言った。
「え？」
「インスリン不足についてを相談できる窓口があって、そこについての情報が載ってるホームページがあるわ。電話番号がしっかり載ってるの」
「ほんとですか！？」
「ええ」
「あたし、ちょっとお母さんに電話してきます！　そのこと伝えてあげなきゃ！」
事務っ子その1は、ロッカーに向かって走った。

「うふふ～。これで一人救えたってことなのかしら～ん」
なぜかずっと踊りの練習をしていた事務主任が言う。
「救えたなんてそんなオーバーな……」
「そんなことはないぞっ！」
タケシの呆れた声に、薬局長が渇を入れる。
「身近な人を、一人一人。これが一番大事なことだ。身近な人を救えなくてどうして地球が救えると思うのかい？」
「いや……地球は救えるとあんまり思ってま……」
「よし。方針が決まったぞ！」
「何がですか？」
二歳年下のセンパイがコーヒー牛乳をズズーっと吸いながら訊く。
「震災が起こり、今、我が薬局でできること、だ」
薬局長は拳を握った。
「インスリン不足の人たちが相談できる窓口があると言っていたが、その他にも、透析の患者さんが相談できる窓口もあるらしいんだ。あとは、調剤薬局を検索できるサイトもある。まぁこれは暫定的なものらしいけどね。それをまとめて薬局に張り出したらどうだろう？」
「でも、別にこっちの人は困ってないんじゃ？」
タケシの質問に、二歳年下のセンパイは久々のハリセンを持ち出してスパンと叩く。
「さっきの事務っ子ちゃんの例を忘れたの？　ここではそんなに大きな問題はでてないけど、親類の人とか知り合いの人とかが被災したりしてるって人もいるじゃない。そういう人も、そういう情報は知りたいはずよ」
「はい！　お母さん、さっそく叔父さんに連絡するって言ってました！」
事務っ子その1が休憩室から戻ってきて言った。実に嬉しそうな表情だ。
それを眺めているうちに、タケシはピンと閃いた事があった。

「そういえば、放射能の被爆が原因の甲状腺ガン？でしたっけ？
その予防とか治療に、昆布とかヨウ素を含むものを食べたらいいって言いますよね。イソジンガーグルにヨウ素って含んでるじゃないですか。そういうことを教えてあげるのもいいかもですよね！」
直後、
スパパパーンッ！！！！
薬局長と二歳年下のセンパイと二人のハリセンがうなった。
「なんですか！　せっかく薬剤師らしい事思いついたのに！」
「何が薬剤師らしいことなのっ！　薬剤師らしからぬことよ！」
「えええっ。なんでですかー？」
「ここを見なさいタケシくん」
薬局長が指さしたのは、これこれこの薬が発売中止になりますよ、とか、この薬が新発売になりました、とか、この薬の包装が変更になりましたよ、とかいうメーカーからのお知らせの文書が張ってある場所だ。
その中の一つに、
「あっ。デマだったんですか？」
そうなのである。ネットなどの情報の中に、放射線被曝による甲状腺ガンの予防や治療にヨウ素を含むものを摂取するといい、という偽の情報があるので、正しいことを教えてあげてください、というような内容だった。他にも、昆布（昆布にはヨウ素が含まれている）を大量に摂取するのも意味がない、という記載もある。ましてや、ヨウ素を含んでるということでヨウ化カリウムという薬を大量に摂取してしまうと副作用がでてしまうということや、本当にヨウ化カリウムで治療しなければいけない人のためのヨウ化カリウムがなくなってしまうのでそれもやめさせるように、との告知の文章もある。
「デマに真っ先に薬剤師が踊らされてどうするのよ。まったく。だいたい、イソジンガーグルとかうがい薬を飲ませるっていう発想が薬剤師的じゃないのよね。うがい薬はうがい薬として製造されてる

んだから、それを飲んだら予防・治療云々じゃなくてそれ以前に健康問題に関わってきちゃうんだから。目薬にヨウ素を含むものがあったらそれを飲ませたりしちゃうつもりだったのかしら」
「・・・・・・」
かなり辛辣な台詞だったが、返す言葉もなかった。
「そういうメーカーからのお知らせ文書は、毎日ちゃんとチェックしないと駄目よ？　薬局長が、知らぬ間に新しいのと張り替えてたりするんだから」
「……すみません…。気をつけます」
「そういうこともちゃんと書いておいた方がいいね。とにかく、今回の震災に役立つ、薬局ならではの情報を伝えることはいいことだと思うから」
「おほほ。今までの会話でのチェック項目は～、しっか～りと、メモってあるわよ～」
歌い上げるような口調で事務主任がメモ帳をこちらに見せてくる。
「さすが主任ね」
「おほほ。当然ですわ～」
「じゃあちょっとざっと言ってみてもらえるかな」
「任せて～、ください～。まず第一に、インスリン不足の時のための相談窓口の案内、透析患者への相談窓口の案内、調剤薬局を検索できるサイトの案内、あとは、ヨウ素を含むものを飲むと甲状腺ガンにいい、というデマに踊らされないこと。こんなものですかしらね～」
「うーん、まだありそうな気がするけどなぁ」
薬局長はなんだかまだ不満げだ。
「あ、薬局長、こういうのはどうかしら。精神科の患者さんに、睡眠薬が足りなくなってしまった時の対処法とか、抗不安薬がなくなってしまった時の対処法とかを載せるんです。薬を飲まなくてもこうしたら落ち着きますよ、とかいうのを参考程度に載せておいたら、ちょっとは違うかもしれないですよね」

「それだ！　そういうのいいかもね。ここ北海道はそんなに被害はないけど、抗不安薬を飲んでる人の中にはそのテレビとかを見てるだけで不安な気持ちになってきちゃって眠れなくなる人もいるみたいなんだよね。そういう人にも役立つかもしれない」
「どこかのサイトに載ってた気がするから、私、調べてみます」
言って、センパイが席を立って調剤室の中のパソコンに向かう。
「じゃあミーティング、終わりにしようか」
薬局長の言葉に、みんなが思い思いの方向に散ろうとしているうちに、本日第一号の患者さんが来た。
「「おはようございまーす！」」
事務っ子の声と薬剤師の声がハモる。
「あらあら。今日はいっぱいいるのね」
腰を曲げたおばあさんは、にっこりと笑って処方箋を受け付けの事務っ子に渡すとゆっくりと待合室の椅子に座った。

後でタケシが思ったことがある。
震災の影響をまともには受けなかった患者さんでも、家族が連絡がとれなくて不安でたまらないという人が結構いるのだ。また、ある患者さんは、ここもそのうち揺れて被害に遭ってしまうのではないかと心配でたまらないとか。
（そういう人たちの話を聞いてあげるのも立派な仕事なんだな）
話を聞いてあげるだけでも、気分が落ち着いたり気持ちの整理がついたりするものなのだ。
タケシは、今日からまた新たな気分でいつもの仕事を始めた。
薬剤師もまったくの無力でもない、ということだ。

第十三話目　タケシ、震災について考察す（後書き）

今回の震災の被害で命を落とされた方には、心よりご冥福を申し上げます。

また、いまだに震災の影響が続いている方たちには、一刻も早く状況が改善することを心から祈っております。

小説本文で、インスリン不足の方のための相談窓口の案内などという言葉がありますが、これらは本当に存在するものです。ここにリンクを張ってもいいものかわからなかったので張りませんでした。

ご要望があれば、アドレスなども表記したいと思います（運営の方の許可が下りればですが）。もちろん、検索をかけていただければすぐにヒットするかとも思います。

最後に、この小説は基本コメディタッチの小説なので、少し軽めに表現してしまいましたが、実際の被害はこんなものではないと思ってはいます。

もしもこれを読んで、不快に思ってしまった方がいらっしゃったら本当に申し訳ありません（それでも一応キャラたちは真剣にこの問題に取り組んでいます）。

第十四話目　タケシ、過誤す　～交換編～

「はぁぁぁ……」
入社したばかり、まだ新人薬剤師のタケシが今日何度目かのため息をつく。
「そんなに落ち込まないの。人間誰だって間違いはあるさ～」
二歳年下のセンパイが、好物のグレープフルーツジュースを飲みながら肩を叩いてきた。
「落ち込みますよ……」
説明しよう。
タケシは調剤過誤を起こしたのだ。調剤過誤とは、間違った薬を渡してしまうことなのだが、間違った薬を患者さんが飲んでしまったら大変なことになるので、薬剤師は日頃から調剤過誤を起こさないよう、細心の注意を払っている。だからこそ、間違えたらそれだけ心のダメージは大きいのだ。
今回のタケシのミスは、ペルサンチン２５ｍｇのところ間違って１００ｍｇを渡してしまった。幸い患者さんはすぐに気づいてこちらに電話をよこしてきたので事故には至らなかった。
「飲んでなかったんだから、セーフセーフ。今度からもっと気をつければいいのよ」
「そりゃそうなんですけど……」
報告書を書きながら、再び深いため息。
「でも、なんでそんなミスしたんだろうね。ちゃんと二重監査（一度監査したものをもう一度誰かに監査してもらうこと）してたんでしょ？」
薬局長がパソコンから目を離して問いかけると、……なにやらタケシの様子がおかしい。目線が完全にスイミングしてるし、カタカタと身体が小刻みに震えてるような……。
「……」

「してたんでしょ？　ん？　どうしたの？」
「……」
「あーあ」
二歳年下のセンパイが何かを察した。
「……すいません…」
「ん？　どういうこと？　してないの？」
「……しませんでした…」
「しなかったんだ」
「はい。ちょっと忙しくて誰も手が離せなさそうで、声もかけられなかったし患者さん急いでるみたいだったから……」
「はい。タケシくん。言い訳しないの」
「……申し訳ありません」
「まぁ良かったじゃないの。過誤の原因がわかったんだから。今度から気をつけることと、あとそれちゃんと報告書に書いておいてね」
「はい……」
調剤過誤を起こしたら、タケシの薬局では報告書を書くことになっている。過誤を起こした薬剤師の名前、患者さんの名前、年齢、どういう間違いを犯したのか、患者さんはどうなったのか、そのときの対応の内容、これからどういうことに気をつけるのか。などなど。結構面倒な書類だ。
「じゃ、僕、患者さんのところに行ってきますね」
午後2時になって、タケシは腰を浮かした。間違った薬を交換しに行くのだが、患者さんが用事があるとかで時間を指定してきたのだ。
タケシは正しい薬を持って（今度はしっかり確認してもらい）、薬局を出た。

今回の患者さんは林村さん。81歳、女性。よく来るおなじみの患者さんのようだが、当然タケシはあまりよく知らない。年のわり

に足腰も丈夫で目も耳も悪くない。悪いのは心臓だけだ（ペルサンチンは狭心症の薬です）。
「あら！　わざわざありがとう。いらっしゃい。よく来たね。ささっ、上がって上がって」
「え？　いや、ここでいいですよ」
「そんなこと言わないの。お菓子、あるからね。さ、上がって上がって」
林村さんの強烈なお招きにより、タケシは靴を脱いだ。
「おじいちゃん。薬局の人、来たよ」
そう言うと、仏壇に手を合わせた。
「さ、あなたも手を合わせて」
「え？　は、はい」
「南無南無南無……」
「南無〜」
たっぷり１０秒ほど手を合わせると、林村さんはお菓子を出してきた。
「さ、食べなさい食べなさい」
「いえ、いいです。仕事中ですし」
「若いモンが遠慮しちゃ駄目だよ。たっぷり食べなさい」
「……いただきます」
タケシは押され弱かった。
そして、ようやく薬を渡せた。タケシは精いっぱいの誠意をこめて頭を下げる。
「大変申し訳ありませんでした。これから気をつけます」
「いいのよいいのよ。さ、供えようね」
「え？　供えるんですか？」
「さ、手を合わせるわよ。南無南無南無…」
「あ、はい。南無〜」
タケシも手を合わせると、ほんとに薬を仏壇に供えた。
見れば、仏壇の片隅に薬が大量に供えられている。

（こ…これは……）
「村林さん。薬飲んでないんですか？」
「薬はね、大事だからちゃーんと供えてあるよ」
「いや、供えないでください。飲んでください。発作が起きたらどうするんですか」
「そんときゃね、おとなしくおじいちゃんのところに行くさね」
村林さんは南無南無～、と手を合わせる。

（困ったなぁ。どうしたら飲んでくれるのかなぁ）
とぼとぼと歩きながら、タケシは空を見上げて考えた。結局、薬をちゃんと飲むように村林さんを説得することはできなかったのだ。
調剤過誤の方は無事に解決したが、タケシの心から霧は晴れなかった。
ふと、死んだおばあちゃんを思い出した。
おばあちゃんも、あんな風におじいちゃんを慕って死んでいったっけ。おばあちゃんは最期まで笑顔だった。おじいちゃんはそれで嬉しかったんだろうか。
村林さんがおばあちゃんと同じように笑顔で逝けるなら、それで旦那さんも本人も満足なのか？
薬をきちんと飲んでもらって、長生きをしてもらいたいというのは薬剤師である自分のエゴなんだろうか。
タケシは歩きながら考える。空はいつの間にか黒っぽくなっており、今にも降りだしそうな気配だった。湿った空気が鼻をくすぐる。

第十四話目　タケシ、過誤す　～エゴ編～

薬を交換して薬局に戻ってきたタケシの足取りは、さっきにもまして重たかった。
鉛と化してるかのような身体を引きずって、調剤室に入り、自分の椅子に座った。そして、ほけーっとパソコンの画面に目をやった。
「どうしたの？　なんか目が虚ろよ？　怒られたの？」
１００％オレンジジュースのパックをストローでちゅーちゅー吸いながら二歳年下のセンパイが聞いてきた。
「センパイ……」
「？」
タケシは、村林さんの家であった事や自分のおばあちゃんの事をすべて話した。
「どうするのが一番正しいんでしょうか？　嫌がる人に無理矢理薬を飲ませて、長生きさせて、ほんとにそれがその人の幸せなんでしょうか？」
「うーん。そうねぇ」
紙パックに突き刺さってるストローが、ぢゅーぢゅるぢゅるっ、と音を立ててる。ジュースの量が佳境を迎えてる音だ。
最後まできちんとジュースを飲み、センパイは紙パックを丁寧につぶしながら言ってきた。
「エゴ。……エゴかぁ。タケシくん。さっき、『薬剤師である自分のエゴ』って言ってたけど、エゴってどういう意味だと思う？」
「んーと？　いやよくわかんないですけど、わがままとかそういう意味ですか？　……よく知らないで使ってる、って責めたいんですか？」
「違うわよ～」
言って、センパイはカラカラと笑う。そして、いきなり真面目な表情をする。

「エゴっていうのは一般的にはエゴイストの略。ざっくりと言ったら、自己中心的な人とかかな。さっきタケシくんが言ったわがままな人ってのもそれに該当するわね。でもね、ほんとはエゴってのは違う意味なのよ」
「え？　違うんですか？」
「そう。自分自身のこと。自分イコールエゴなの。自分で考える事。自分が考えた事。それオンリーになっちゃったらほんとにエゴイストだけど、自分で何かを考えて行動するのは当たり前の事。エゴの他に他の人の考えや意見を取り入れれば、それはエゴではあるけどエゴイストにはならないわ。まぁもっとも、取り入れてるつもりで全然取り入れられてない人もいるからなんとも言えないけど。取り入れてないくせに自分では取り入れてるとか言ってる人とかね。めっちゃむかつくわ！」
「……あの、意味が分からないのですが…。そしてセンパイなんだか怖いです」
「ああ、ごめんごめん。ちょっと……いや、かなり話が逸れちゃったわね……。えっと、薬剤師が病人に薬を飲んでもらって元気になってもらおうって考えるのはエゴイストの考えじゃないわよ。社会通念的に当たり前の事。医者が病人を見たら治したくなるだろうしね。それが自殺しようとした人でも」
「あ……」
センパイは最後の一言をちょっと強めに発音した。
『自殺しようとした人でも』
それはその通りだった。本当に、まるっきりその通りだとタケシは思ったのだ。
「自殺しようとした本人にとったらその時はほんとに余計なお世話だけど、もしかしたら何年後かくらいにその事を良かったと思えるようになるかもしれないわよ」
「そうですね」
「だから、タケシくんの考えてる事は間違いじゃないわよ」

「はいっ！」
「もっとも、薬を飲む事で具合が悪くなったりなんか調子悪くなるから飲みたくなくてとか、そういうのはちゃんとチェックしないと駄目よ。患者さんのＱＯＬ（生活の質）も考えてあげながら、薬を飲んでいただくの」
「分かりました！」

次の日タケシは、出勤してくるなりインターネットに釘付けになった。
「他の事例を調べて、なんとか飲んでもらう方法を考えるんです！」
忘れてる方もいるかもしれませんが、タケシは凝り性なのです。
「村林さんみたいなのをアドヒアランスが悪いっていうのかぁ。そういう人に薬を飲ませる為には病識（病気であることを自覚すること）を持たせることが重要である、か。ふむふむ。でも病識は充分すぎるほどあるもんなぁ。患者さんに、病気を治すのだという強い意志を持ってもらって治療に参加してもらう事が大事であり……」
ブツブツ言いながら調べてる様子を見て、二歳年下のセンパイはほほえましそうに見ている。
「タケシくんも立派になりましたねー、薬局長」
「そうだねぇ」
ずずず、とお茶を一口。
「それにしても」
「なんですか？」
「このままだと読者の人に、すっごくヒマな薬局だと思われるよね」
「ていうか、どうして昨日家でやってこなかったんでしょうか……。家にもパソコン、あるはずなのに」

第十四話目　タケシ、過誤す　～先生なんて照れるぞ編～

その日の夜……仕事が終わった後、タケシはとある物を抱えてもう一度村林さんのお宅を訪問した。

「あれまぁ。また来てくださったのかい？」

「はい。ちょっとお話があって。あ、その前に、また仏壇に手を合わせていいですか？」

「あれまぁ。それはきっと喜ぶよ～。ほら、上がって上がって」

そのまま家に上がるとタケシは昨日と同じように仏壇に手を合わせた。

「南無南無～」

訂正。昨日よりもちょっと長めに手を合わせた。

（よし…！　いくぞ）

心の中で気合を入れてタケシは一つ深呼吸をし、くるりと後ろに向きを変える。村林が微笑ましく見ていた。

「村林さん、これを見てください」

タケシは、持ってきたものを村林さんの目の前で広げた。それは何枚もの紙が挟まっているファイルで、本来なら患者さんに見せることはないだろうものだった。

「なんだい？　これは」

「これは、薬歴（やくれき）っていうものです。患者さん……村林さんの旦那さんがうちの薬局に来て、どんな薬が処方になっていて、旦那さんがどういうことを訴えていたかを詳細にまとめてある記録です」

調剤薬局では、薬歴は必ず記載しないといけない決まりになっている。タケシは今日一日かけてこれを探し当てた。薬歴の保管義務は3年。最後に旦那さんがタケシの薬局を訪れたのは3年前なのでギリギリだった。

村林さんがお茶を飲む手をとめて、紙を覗き込む。そして少しのあいだ間近で薬歴の紙をのぞき込んで目をすがめたりしていたが、

見えないらしく、手探りで老眼鏡を探していた。けれど見つからなかったようなので、タケシは声にだして読んであげることにした。

8月1日

「ちょっとばあさんが風邪を引いてるようなんだ。だからこの風邪薬はばあさんに飲ませようと思って処方してもらったんだ」

薬の内容はいつもと同じ＋ＰＬ顆粒

「ＰＬ顆粒という風邪薬でてるが、ほんとは人にあげたら駄目なこと伝えてお渡しした。眠気がでることあるので気を付けるよう指導した　薬剤師　Ｓ」

8月14日

「ああ、この間の薬でなんかすっごく眠くなったみたいでな。もう飲みたくないって言ってたな。家事ができんと。でも次の日には風邪なんて治っとったわ。俺？　俺は特に変わらんなぁ。いつも通りだ」

薬の内容はいつもと同じ。ご本人さんの体調も変わりない様子。

（ＰＬ顆粒で奥さんが眠気がでたようだった）

「このまま続けて飲んでください。（奥さんの風邪が治って嬉しそうだった）　薬剤師　Ｓ」

8月28日

「今日、採血してきたんだよ。だからきっと身体に血が足りなくなってるんだな。なんかクラクラするんだ。結果は今度だけど、はっきりいって結果なんてどうでもいいんだけどな。ただ、変な数値がでてばあさんが心配したらやっかいだな、とは思うんだよな。あいつ心配性だから」

薬の内容はいつもと同じだが今回は7日分。採血した様子。次回結果確認してください。

「クラクラするとのことで、帰り道気を付けてくださいね。　薬剤

師　S」

9月1日

少し早めの来局。薬はいつもと同じ。

なんだか暗い様子で、いつもの饒舌さはまったくなくなっていた。前回の血液検査の結果はどうだったのか聞くも何も答えてくれずに早く帰りたそうだった。

「続けて服用するよう伝えた　薬剤師S」

9月2日

本人よりTELあり。

「いつものさ、Sさんっていう薬剤師さんいるかな？」と事務に言っていたようだったがその日不在だったため別の薬剤師が担当した。

「Sさんいないのか？　そうか……、ならいい」といってすぐに電話を切った。

9月11日

「なんかな。今度入院するみたいなんだよ。血液検査のなんだかっていう数値が悪いんだって。まったくなぁ。ばあさんが心配しちゃってさ。…そういえばこないだ、あんたに電話したんだけどさ、いなかったんだよな。ちょっと相談したいことがあって」

薬の内容は同じ。血液検査の結果で異常値でたため再入院の様子。どの数値が悪かったかは聞き出せず。奥さんに心配かけてしまってる事についてとても気にされてるよう。

相談内容について、以下のように語っていた。

「実はな、この薬……ワーファリンだっけ？　これ、たまに飲まなかったりしてたんだよな。いや、これを飲むと納豆食えないってよくいうからさ、昔から俺は納豆が好きで、どうしても食べたい時なんかは薬飲まなかったりしてたんだ。もしかして、今度の入院もそれが原因なのかと思ってさ。俺がわがままいったばっかりに入院に

なって、ばあさんに心配かけて。それならちゃんと薬飲んで、納豆は我慢しときゃよかったな」

ワーファリンと納豆には確かに相互作用があるが、どこか誤解されてる様子。以下のように説明。

「納豆がお好きなんですね。たしかに納豆はワーファリンの作用を弱めてしまう事があるので、一緒にはとらない方がいいですが、だからといってワーファリンをやめてしまうと、血栓ができやすくなってしまうのであまり良くないと思います。お医者さんと相談して、納豆を食べながら血液の状態を確かめつつ治療をしていく方針というのも聞いた事があります。お医者さんに聞いてみて、検討してもらってはいかがでしょう？　もちろん、ワーファリンと納豆は相性が悪いので一緒に飲むのはおすすめしないのですが、そういう方法も最終的にはあるという事で……」

結果、村林さん（夫）はこの説明に納得した様子。

「うん。今の説明ですごくよく分かったよ。こんな感じでちゃんと薬剤師さんと話して、ちゃんと薬飲めば病気も悪くならなくて済んだのかもな。もしアイツ（村林さん・妻）が薬飲むようになったら、きっちりとそう言うよ。もうアイツも歳だからな」

と言って明るく笑っていた。

それが、薬局で村林さん（夫）の姿を見た最後だった。

「その後で、旦那さんは亡くなられたんですよね？　奥さんがうちにいらっしゃる事になった時にそうお伺いしたと思います。旦那さんは、自分が薬をちゃんと飲まなかった事を最後まで悔いていらっしゃいました。妻には同じ失敗は繰り返して欲しくないと。だから、お願いします。旦那さんの為にも、薬、ちゃんと処方通りに飲んでください。そして、長生きしてください！」

一気に言って、タケシは荒く息をついた。

村林さんは目を伏せて、お茶に手を伸ばした。ちょっと遠かった

ので、タケシが手を伸ばしてとってあげた。
そしておもむろに、話し出した。
「おじいさんはそんな風に言ってたんだね。……分かった。供えるのが一番いいと思ってたんだけどね。これであっさり昇天しちまったらおじいさんに会わす顔がないよ」
ずずず、とお茶を飲み下すと、こちらに視線を合わせてにっこりと笑ってきた。
「教えてくれて、ありがとうさん。タケシ先生」
「い……っ、いやぁ、先生だなんてっ」
タケシは舞い上がった。
「これからも、よろしく頼むね」
「はい！　こちらこそ！」

それから何度か村林さんのお宅にタケシは足を運んだが、薬をためてるようには見えず、その代わりの進歩といってはナンですが、薬の事に対してものすごい興味を持ったようで、毎回いろんな質問をしていきます。……いや、それくらいの方がいいのかもしれないけど。

第十四話目　タケシ、過誤す　～先生なんて照れるぞ編～（後書き）

薬歴の書き方は実際とは異なっていることをご了承ください。話を少しでも分かりやすくするようにこのような書き方とさせていただきました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0399h/

薬剤師が征く！

2011年10月3日03時39分発行